
RPG W(・ ・)RLD——**ぼくのステキなD A 天使サマ**——

貝塚ゴロー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RPG W（・） RLD――ぼくのステキなDA 天使サマ

【Nコード】

N2838Z

【作者名】

貝塚ゴロー

【あらすじ】

「突然だが俺は堕天使が好きだ――」
大企業のボンボンが行く、良い子のための堕天使（笑）による異世界譚。

「えっ、この世界ってサザエさん観れないの？ マジで!？」
ノリと根性、ときどき真剣でお送りするハートフルでサスペンス、
そんでもってコメディ的なRPG、始まります。 この小説はRPG W（・） RLDの二次小説です。そしてこれはどこまでい

つても作者の自己満足の産物であることを記します。

こだわりの持つて、人は初めて強くなれる（前書き）

ハイ、皆さん初めまして。貝塚ゴローです。

この小説は基本的にオリ主視点での話のため、原作主人公達の行動、心情等を詳しく知りたい場合は原作を読むことをお勧めします。

また、「お前前回と今回で話矛盾してんじゃないか！ クソガッ！」

「ハッ、ここ字イ違いから、俺が教えてやんよっ！」等ありましたらコメントフォームにて放出してください。

こだわりの持つて、人は初めて強くなれる

俺こと桐条瑠依^{きりょうるい}は万物に対してこだわ리と言うものを持ち合わせている。例えば、そう、ボーリングの球だったり、カラオケの機種だつたりもそうだ。

歴史上、何か功績を残している人物というものは総じて譲れない何かを持ち合わせているものだ。

こだわりの持つて者は天下を取る、とあの豊臣秀吉も言つたり言つてなかつたり。

とにかく、俺はこだわりを大事にする男だ。

そして、それはゲームに対しても同じだ。まず、ゲームを始める前に俺はそのデータを自分に都合の良いように改鑄する。

と言つても原型はなるべく保つたまま氣に入らない部分だけを挿げ替えるみたいな感じでだ。

開発者への冒涇だとか、そんなものは関係ない。何度も言つが俺はこだわりを大事にするのだ。

話は変わるが、俺の父さんは大企業の社長だ。桐条グループと言えはそりゃいろんな事業に手を広げている事で有名だ。

大体そこらへんで物を買つてくれば五つか六つぐらいは桐条の名が入っている事からもそれはうかがえる。親父エ。

それで今度はゲーム部門にも手を出したらしい。『ギヤスパルクの復活』と言つ今時捻りも無いネーミングだが、エンパイア社との共

同開発が進められていて、先月ベータ版のテストプレイヤーの募集が始まった。

このソフトのゲーム機は満点堂から出ているZIEで、ハード自体が発売して間もないのである種の人柱要素が含まれていない訳でもない。

このゲームのマーケティングには「細部まで本元見紛うばかりに構築された3D世界!」「自動生成されるNPCやクエストによって無限に続く冒険!」「物語はあなたが作る!」とか非常にゲームの興味を引く文句が並べ立てられてあって、俺は2chで袋叩きにされるかと心配していたのだが、予想と反して書き込まれたのはゲームを絶賛するコメントだった。

父さん……スマン。俺、あんたの事疑ってたぜ。

ところで俺もこのゲームを持っている。

別に応募に当選した訳ではない。

兄さんがゲーム開発部門の主任を務めていて、この前ふらりと現れて置いていったのだ。

一応、貰った事だしプレイしてみようとした俺は、データを弄ろうとして手を止めた。どうやら既存のゲームとは違った格納方式が使われているらしく、まずデータが開けない。

ほんと困り果てた俺は、実家の兄さんのPCを漁った。自分のこだわりの為には妥協はしない、これが俺の忍道なのだ。

兄さんは割と仕事を持ち帰る人らしく、PCの中には『ギヤスパルクの復活』の開発に使われたツールやら何やらがそのまま残っていた。……それでいいのか主任よ。

何はともあれ、まんまと目的を達成した俺はさっさと改造を始める事にした。

作業を始めると、このゲームの作り込みの深さが感じられた。まず、外装データの種類が豊富だ。何千と揃えられた3Dグラフィックはこれだけでどれだけの

時間をかけたのか、開発陣の苦勞が窺い知れる。他にも多種多様な職業のデータが陳列されている様は俺の改鑄魂を燃え上がらせた。

俺は三日三晩それこそ一睡もせずデータを弄り倒し、朦朧とした意識のまま、俺好みに改造した『ギヤスパルクの復活』のROMを片手に床にぶっ倒れた。

●○○●○○●

三ヶ月後。

あれから俺式改造『ギヤスパルクの復活』をプレイし続け、いい感じにキャラクターも育ってきた。

『ギヤスパルクの復活』は何百という数の職業の中から一つを選択し、職業ジョブごとに異なるスキルでもって冒険を進めていくというのが基本コンセプトだ。

戦闘方法はエンカウント方式ではなく、広大なフィールドにスポーンするモンスターをリアルタイム制で葬っていくという点が非常に俺の好みであった。

ちなみに俺の職業は堕天使、このゲーム風に言うのならダテンシだ。『ギヤスパルクの復活』にはそんな職業はなかったが俺が外装やら能力やらをツールで弄って作り上げた。

堕天使こそ俺の正義、ジャステイス異論は認めない。

けっして俺が中二病患者であるとかではない。そう、断じてない。

「さーで、今日も熟練度上げに勤しみますかねえ」

『ギヤスパルクの復活』はスキル熟練度制ではないが、俺が勝手にシステムを変更した。ティンときてやった、反省はしていない。

このスキル熟練度制、スキルを使えば使うほど熟練度と言う名の経

験値が溜まっていき、一定値に達するとスキルレベルが上がってスキルの使い勝手が良くなっていくシステムだ。

俺はなにかとキャラクターが成長していくのが大好きなのだ。

他にも俺が勝手に変えたシステムは多々あるが、ここでの詳細は省く。

とにかく、俺は今日もレベル上げとスキル熟練度を稼ぐためにモンスターをひたすら狩っていた。今は春休み前ではあるが、俺の通っている学校は開校記念日と土日が重なって三連休だ。時間はいくらでもある。

「あー、やべえ。サザエさんの時間じゃん。一旦休むか」

サザエさんは社会によって荒んだ俺の心を癒してくれる。関係ないけどタ。ちゃんてエコカーのCM出てるよね？声の人。

サザエさん一家が家へと帰ったところで、テレビの入力を変え、再び『ギヤスパルクの復活』をプレイし始める。

その後はコンビニに夕飯を買いに行つて、食べ終わると直ぐにテレビに向かいなおった。大企業の息子だからって夕飯コンビニで済ませちゃダメとかそんな事はない、断じてない。

ドワ。ゴが日付が変わったことをお知らせしたところで、テレビの電源を切つてベッドへ向かった。

この日、俺はすんなりと眠りにつく体勢に入ることが出来た。いつもは横になってもしばらくは眠れなかったのだが。

不思議には思ったものの、眠りたいと言う欲求には勝てず、俺は^{まぶた}瞼を閉じた。

こだわりを持って、人は初めて強くなれる（後書き）

お疲れ様です。

とりあえず原作一巻ラストまでは大方書きあがってますので、そこまで間隔が空くことはないと思います。

知らない町に来たらとりあえず酒場に行けって、うちのじいちゃんと言ってた。

投下します。

知らない町に来たらとりあえず酒場に行けって、うちのじいちゃんが言った。

この日、俺は背に土の感触を感じること眠りから覚めた。辺りは木々が鬱蒼と生い茂っていて、如何ともしがたい不気味さを放っていた。

「……はい？」

思わず呟いてしまったのもしかたがないだろう。それだけ俺は混乱していた。

考えてみてほしい、寝て起きたら森の中でした、なんてあるか普通？
少なくとも俺はない。

兄さんとのキャッチボールの最中に父さんの大事な壺にボールをぶち当てて粉碎したときもそれはなかった。

なんで俺だけ怒られたかとか、そういうのは気にしない。

とにかく、現状を確認してみない事には何も始まらない。落着ききりじょうめいに定評のある桐条瑠依は狼狽えんのですよ！これしきの事では。

自分の服装は見た事のない物に変わっている。というのも、白を基調としたロングコートに所々金色の帯で十字に締めてある服で、どつかの格ゲーのキャラが着てそうな服だ。

いや正確には、現実で見た事のない、が正解だ。

俺はこの服を見たことがある——テレビ画面越しに。

そうだ、この服は『ギヤスパルクの復活』で俺のキャラクターが装備していたものだ。

これはあれだろうか、ゲームの世界に訪問しちゃったとか、そういうことだろうか。

だが俺が履いているのは寝るときに足元に置いていた家用のスリッパだ。

しばらくうんうんと唸っていたが、情報が少なすぎてまだ判断は下せない。

どちらにせよ異常な事態であることに違いはない。

どうしようかと悩んだが、こういうときは、まず最初に現地人を探すのがセオリーである。

そこから俺の行動は素早かった。藤岡隊長ばりのサバイバルスキルでもって木々の間を抜け、あっという間に森を脱出することに成功した。

そして、俺は平野にいる。

先程の森を抜ける過程で分かった事だが、この世界は『ギヤスパルクの復活』の中である可能性が高い。

森を抜ける道中、俺は危険な生物やらに出会わなかった事で危機感が薄れていたのだが、不意に何かの気配を感じて比較的幹の大きい木に身を隠した。

『ガードアント』。軽自動車ほどの体格を持ったそれは、獲物を捕食するのに使うのだろう罠あきこをガチガチと打ち鳴らしながら、身を隠した俺のすぐ真後ろを通り過ぎて行った。

正直、冷や汗が止まらなかった。人間は自分より大きな生物に対し

て潜在的な恐怖を感じるという事を差し引いても、あの怪物と言ってもいい様相に俺は軽くパニックを引き起こした。

あれから、怪物と遭遇する事なくここに辿り着けたのは運が良かった。

そして、俺は今になってあの怪物の異常さに気が付いた。

まず、何故奴の名称が『ガードアント』だと分かったのか。

俺はあんな生物の名称なんて知らないし、そもそもあんな化け物が地球に生息していたらダスキンは今頃ひっぱりだこだろう、効くかは知らないが。

では、何故か。

ご丁寧に奴の頭上に表示されていたのだ。『ガードアント』、と。

いや、知らない訳ではなかった。俺は奴と対峙したことがある……これもテレビ画面越しにはあるが。

『ギヤスパルクの復活』ではゲームのスタート位置は完全にランダム式に決められる。そして、俺のゲーム開始時の位置はアルダ村というプレイヤー拠点の近くの森だった。

俺のキャラクターがフィールドにスポーンし、さあいくぞ、と意気込んだところで奴にヌツ殺されたのは記憶に新しい。

後にも先にも、スタートした瞬間に死亡するゲームなんてこれきりだろう。

そして、今日目が覚めた場所も思い返すとどことなく既視感があったような気がする。

さらに、モンスターの頭上に名称とHP、MPヒットポイント、マジックポイントが表示されていた。これもこのゲームの特徴だった。

いよいよもってここがゲームの世界であると言っ線が濃厚になってきた。

これから帰れるかは別にして元の世界に帰れる方法を探るか、それともこの世界をエンジョイする道を進むか。

どちらにせよ、まずは情報を集めなければいけないだろう。

「……とりあえず、町にでも行きますかねえ」

●
○
●
○
●

あれから長つたらしい道なき道を歩き続けた俺は、眼前に泰然とそびえ立つ門を見上げた。

出発した頃には昇っていた太陽も今は沈みかかっていて、今になつてどつと疲れが押し寄せてきた。

この門の先にあるのはメルダの町。それなりに発展しているようで、もう夕方だというのに客寄せの声などが門の外のこちらにまで聞こえてくる。

とにかく、中に入らない事には始まらない、と俺は門の前で槍を片

手に持った衛兵らしき人に話しかけた。

「すみません、旅の者なんすけど。町に入れてもらえます?」

「ん? ああ、構わんど。ちよつと待つてろ今門を開ける」

どうやら簡単に入れてもらえるようだ。

俺は軽く礼を言っただけで門を潜った。

さて、何故俺が近くのアルダ村に行かずにわざわざ半日も歩いてこの町にきたのか。

ずばり、情報収集の為だ。古来より情報と言うものは人の多い場所に集まると相場が決まっている。

ドラクエのルードの酒場然り、なんか教えてくれるだろ? ヒントとか。

そついうわけで、俺は疲れた体に鞭打ちながらも酒場を探して町を歩いていた。いたのだが……この町、広い。

ゲーム画面と現実では物の尺度が違うということを今更ながらに実感した。先程からゆうに20分は歩いているのだが、酒場の存在する区域には辿りつけていない。

若干辟易しつつも歩き続け、さらに20分程経ったところで目的の場所に着いた。

この境界はいくつもの酒場が固まっていて、どこか混沌とした様相を醸し出している。

その中でも太陽をモチーフにした看板を掲げた店を見つけ、戸を横に滑らせて店内に入った。

室内はランタンの灯りが怪しく揺れていて、匂いも酒臭い。

店内の各所には丸テーブルが設置されていて、テーブルを囲んだガラの悪そうな男たちが酒をcaff喰らいながら何事かを喚いている。

この酒場は太陽亭と言って、ゲーム内ではプレイヤーに対してクエストを提供する施設だった。俺も序盤の金策では重宝した記憶がある。

この世界においてここがそういう施設であるかは確証が持てないが、確率が高いだろう。

俺はカウンターへと足を進めた。

席に着くと酒場のマスターが不遜な態度でオーダーを取りに来たので、静かに「……酒」と返す。

酒場に来たらこれは外せないだろう、いわゆる様式美と言うやつだ。

…… 本人が酒を飲めるかどうかは関係ない。未成年だしね。

しばらくすると、店の奥へと行っていたマスターがジョッキを片手に戻ってきた。

スツと俺の手前にジョッキを置くと、一歩下がって洗ったグラスを拭き始める。

まさにテンプレといった行動に俺は興奮を隠せなかった。そう、酒場と言ったらこれだよ！

そのまま酒に手をつけない俺を怪訝に思ったのかマスターが口髭を動かして喋った。

「お前さん……酒は飲まねえのか？」

見かけ通りの渋い声色でマスターが言った。

俺は迷うことなく言葉を返した。

「旅の者だ、情報を聞きたい」

そういつてカウンターに五千Gゴールドを置いた。

マスターは僅かに目を見開いたが、すぐに元の無然とした表情に戻った。

ゲームの中では初期の依頼報酬はおおよそ八千G、命をかける冒険者の一回の仕事量がそれほどなのだから一般人にはそれなりの金額だろう。

それはこの世界でも変わらない筈だ。

ちなみに金は町までの道中で拾った。モラルだとか教義だとかそんなモンは関係ねえ。

「……して、何が聞きたい？」

ちやっかりGを懐に回収したマスターが幾分機嫌の良さそうな顔で呟いた。

別にこんな真似しなくても世間話を装ってこの辺りの情勢を聞くだけでもよかった。

ただ俺がこのやり取りを試みたただけだ。

しかし、やってしまったものは仕方ない。ここは一つデカイ事を聞いてみよう。

「……金になる仕事を」

知らない町に来たらとりあえず酒場に行けって、うちのじいちゃんが言ってた。

さっさと主人公組に絡ませたいぜい。

RPGって大抵は世界存亡の危機に見舞われるよね（前書き）

ハイ、というわけで投下します。

未だ戦闘描写に入らないっていう異世界の設定を潰す展開があああああああ。

RPGって大抵は世界存亡の危機に見舞われるよね

あれからマスターに依頼の情報を渡された俺は、依頼人が逗留している宿屋に向かっていた。

この辺の国の事とかを聞くだけのつもりが随分と大きな話になってしまった。

俺が情報を集めていた理由は、この世界と『ギヤスパルクの復活』との差異を調べるためだ。

なぜなら、ここが異世界であるにしても、そこが画面越しに知っているものとそうでないものでは今後の活動に大きな違いが出るからだ。

つまり、万が一ここがゲームの中だった場合タイトル通りに『ギヤスパルク』が復活してしまう可能性がある。

『ギヤスパルクの復活』のストーリーは単純なもので、剣と魔法の世界——エターナルでプレイヤーが『大魔王ギヤスパルク』の復活を止めるべく冒険する、といったものだ。

俺はストーリー自体をそこまで進めていないため分からないが、大魔王が復活するのだから確実に良くない事が起こるだろう。

テンプレ的に言えばギヤスパルクが復活して世界が崩壊、すなわちゲームオーバーだ。

元の世界に帰る方法があるにしても、それがすぐに見つかるとは思えない。俺がこの世界にいるうちに『ギヤスパルク』が復活したとしたら最悪だ。

そして酒場でのシステム面の事もそうだが、ここまでくるとここが『ギヤスパルクの復活』のゲームの中であると疑う余地がないように思える。

それはタイトルの『ギヤスパルクの復活』が高確率で起こるということの意味している。

となると、俺の取り得る行動は元の世界に帰る方法を探しつつ『ギヤスパルクの復活』を止めるべく動く、の2つになる。

別に元の世界に帰るかどうかは決めていないが、この世界……つまりはエターナルが崩壊する事になったときに逃げ場ぐらいあった方がいいだろう。

「でも俺にそんなことできんのかねえ。自慢じゃないけど俺、一般^{バン}人^ビよ。スペ。ンカー先生ぐらい役立たないよ」

ゲームの中では一騎当千のキャラクターでも中の人は大したことはない、ただの高校二年生である。

そして、その中の人である桐条瑠依^{きりじょう るい}が凶悪なモンスターの跋扈するエターナルで何ができるのか、そもそも俺は生き残れるのか。

まあ、とりあえずは先立つものが必要だろう。件の宿屋の看板が見えてきたことで、俺は一度思考を捨て去った。

● ● ● ● ●

どうやら受付には既に話を通してあったらしく、受付は俺の姿を見ると依頼人の部屋の番号を教えてくれた。
あのマスターはアフターサービスも忘れないようだ。

洒落た置物が展示された廊下を進む。目的の部屋は二階の廊下の最奥にあった。
俺は扉をノックした。

「誰だい？ 食事なら今日はいらないよ」

聞こえたのは若い女の声だ。どうやら俺を従業員と間違えているらしい。

「……依頼の件についてだ」

こういうのは雰囲気が大事だ。この瞬間だけは俺は必殺仕事人口調で通す。司会の人で。

俺が低い声で返すと数秒の後にかしゃんと鍵の開く音がした。

紳士な俺は勝手に入っていいか迷ったものの、女が入室を促してきたのでゆっくりと扉を開いた。

室内は備え付けの机とベッドが置いてあるだけの簡素なものだった。それでも、各所に置かれた小物の類は品がよく、女将おかみのセンスの良さを感じさせる。

「あんたが依頼を請けた奴かい？ ひよろっちいけど……大丈夫か

ねえ」

俺が視線を窓のほうに向けると、女がこちらに獰猛な笑みを返してきた。

頭上に表示されている名前は『マリィ』だ。

腰に長剣を提げているところを見ると冒険者なのだろうか？

「へえ、『キール』か……。 “あいつ”と一文字違いなんているとこにはいるもんだね」

俺はマリィの言葉に疑問を覚えた。“あいつ”という人物に対してではない。

何故、俺のニックネームを知っている？

酒場のマスターにも名前は聞かれなかったことから、おそらく服装の特徴を宿に連絡したのだと思っていた。

だからこそ受付は俺の姿を見て部屋へと促したのだと……。

そこまで考えて、マリィの視線が俺の頭上に向かっていている事に気がついた。

ん？ 頭上……？

俺は机の上に置いてあった鏡を見て驚愕した。
んじゃこりゃあ！？

鏡に映った俺の頭上には、『キール』というキャラクターネームと赤と青のラインが二本表示されていた。

そうだ、『ギヤスパルクの復活』の中ならあって当然だろう！
なんで気がつかなかったんだ！

メルダの町に来ることだけに頭がいっぱいで自分の事に全く目が向いていなかった。

そしてマリーが言った『キール』と言う名前。俺が自分の名前をもじって作った俺のキャラクターの名前だ。

なるほど、ということは、だ。俺はエターナルにおいて桐条瑠依きりじょうるいではなく『キール』だ。

つまり、俺は自分が育てた分身の魔法や技を使える可能性が高い。

「どうしたんだい？　ボーっとしてるけど、本当に依頼を任せて大丈夫なんだろうねえ」

思考の渦に呑み込まれた俺は不意にかけられたマリーの言葉によって現実に戻された。

「ああ、少し考え事をしていただけた。仕事の説明を始めてくれ」

俺は努めて平静を装って言った。このマリーという女、自然体であるにも関わらず刃やいばのような鋭さを感じる。

マスターに要求した「金になる仕事」に該当する依頼だけあって危険度は相当なものだろう。

だが、俺は依頼そのものよりマリーにたいして脅威を感じた。どちらにせよ油断はしない方がいいだろう。

「今回の依頼はある人物の誘拐だよ。……と言っても誘拐自体は私の部下がもう成功させちゃってるからねえ。すぐにも依頼の紙は取り下げるつもりだったんだよ」

やはり、高額報酬だけあって碌な内容ではない。

俺は別に酒場のやり取り自体に興味があっただけで、悪人プレイがしたい訳じゃねえつつうのに。

それに、マリーは既に依頼の件は達成されたと言った、それなのに俺をこの部屋に通したという事は別の目的があるのだろう。

「では俺をここに呼んだ理由はなんだ？悪いが俺も暇じゃない、用がないのなら帰るぞ」

虚勢ではあるが俺は冷然とした態度を崩さなかった。

「まあ、そう慌てないで。そうだ、一つ面白い話をしてあげるよ。今回の依頼に関係はあるからねえ」

俺の返答を待たずにマリーは語り出した。顔には依然凶悪な笑みが張りついたままだ。

「あたしが出した依頼つてのはね、このエターナルに大悪魔を復活させるための下準備のことさ。なんでもその大悪魔つてのがギヤスパルクって名前だね、エターナル各地に点在する七柱の魔神の封印を解かないとならないらしいんだよ」

「実に荒唐無稽な話だな。今時子供でももつとまじな話を思いつく」

声色には表れなかったが、俺の内心は戦々恐々としていた。

この女、今なんて言った？確かに『ギヤスパルク』と言っていた、復活させるとも。

まずい。

非常にまずい。

俺が恐れていたことが現実のものとなった。

既に『ギヤスパルクの復活』へのカウントダウンが始まっていた。さらにマリーの言に部下という単語も聞こえた。となると複数人、もしくは組織的な規模で計画が進められているはずだ。

「まあ、疑うのも分かるけど全部事実さ。じゃなきゃあんな大金払うわけないだろう」

「話を続けるよ」と、マリーは言を紡いだ。

「その封印つてのが厄介でねえ。封印を解くための呪文が必要なんだけど、呪文は守護を務める神官しか知らないんだよ。ここまで言えば分かるかい？」

マリーは口元を三日月型に歪ませて愉快そうに問いかけてきた。その姿は狂気に満ちているのに、どこか蠱惑的だった。

「……誘拐したのはその神官という事か？」

「正確には神官の娘だけどね。今は部下が洞窟の最深部で封印を解く呪文を聞きだしているところさ。……ただ、その部下つてのがどうにも鈍臭くてねえ、あたしとしては不安なんだよ」

「要件を言え、お喋りに付き合う暇はない」

俺はすぐにこの場を離れたかった。

マリーの発する狂気によって部屋の空気が濁っているように思えた。

「つれないねえ、まあいいさ。あんたへの依頼つてのはアルダ村の近くにある魔神を封印した神殿に行って部下の護衛をしてもらったとき。なあに、頼り無いって言ってもレベルは四十を超えてる、要

するに保険だよ、保険」

「……そうか、では契約完了だ。報酬はあんたからもらえばいいのか？」

「おや、驚かないんだねえ。エターナルの奴らにとつちやレベル四十って言ったら英雄ぐらいのもんだろうに」

俺はマリーの言葉に強い違和感を持った。どこか違う場所からこの世界を眺めているような、そんな言い方だった。まさか、この女！？

「エターナルと地球の人間じゃあ存在そのものの大きさが違うからねえ。英雄って言つても……あー、あんたに言つても分からないか」

今の言葉で確信した。このマリーと言う女、エターナルの人間じゃない……地球から来た奴だ。

俺以外に同じ奴がいることなど考えもしなかった。

原因はやはり『ギヤスパルクの復活』のゲームだろうか？ それならばギヤスパルクの事を知つていてもおかしくはない。さらにこの口振り、地球から来た人間を特別視したような……。

予想だが俺がエターナルにおいて『キール』であるように、こいつ等も自分の分身の力を持つている筈だ。キャラクター

エターナル人にとっては驚異的なレベルであっても、ゲームをやっていた人間にとってはキャラクターのレベルを引き継ぐわけだから何てことはない、そんな余裕から来た発言だった。

それならば辻褄つじつまも合う。

なんにせよマリィに俺が『地球人』だと言うことがばれるのは得策ではない。

幸い、俺の何も知らない事を装う演技と俺がハーフだという事もあってマリィには気付かれていないようだ。

学校で母さん譲りの金髪や日本人離れした顔つきをさんざんバカにされてきたため、俺も自分の容姿は好きではなかったが、このときばかりは感謝した。

とにかく、ここは依頼を破棄してすぐにこの町を離れるべきだろう。俺はそう思っけて口を開きかけたが、

「おつと話がずれちまつたねえ。報酬の金は部下に持たせてるよ、持ち逃げされたら堪らないからねえ」

マリィの言葉によって閉口せざるを得なかった。

クソッ、やられた！

俺の素性については気付いてないようだが、既にマリィの組織に俺が依頼を請けた事は伝わっているだろう。

情報の漏れを防ぐための策か……、おそらく依頼を受託した奴を依頼の完了と同時に一蓮托生にして組織に繋ぐ筈だ。

そして、離別しようとした場合はこいつの仲間達に消されるだろう。

甘かった！ 魔神復活なんて事を企む奴らがバカなわけないのに！ こんな事ならノリなんかで依頼を請求するんじゃない……、と言ってもこいつ等の情報を知ったのはここに来てからだ、どっちにしろ後の祭りだ。

俺が今打てる最善の手はこの依頼を完遂した後で、こいつ等の組織

とは軽い協力体制という状況に持ち込んで納得させることだ。

どちらにせよこのバカげた計画に参加する事にはなるが、組織への加入よりはましだろう。

こいつらの目的上必ずどこかで殺人を犯す筈だ。

俺にだって人間として最低限の良心ぐらいはある。

例えばゲームの中だとしても、限りなくリアルに近いこの世界で人を殺すなんてできない。

そして、ハッと気づく。

考えてみれば地球人が全員こいつ等の仲間という事はない。恐らく正義感に溢れた奴らは世界の悪へと対抗する筈だ。

ならば俺はエターナルの地球人に接触し、善へと引き込む。そして、両方の勢力が均等もしくは善が優勢となった瞬間に悪と手を切り、反撃の余地も与えずに一気に潰す。

地球に戻るにしてもエターナルに永住するとしても、こいつ等の存在は確実に俺の邪魔になる。

とにかく今は依頼の達成を目指すしかない、俺は内心で猛った感情を表に出さないように注意して言った。

「……よし。では今度こそ契約成立だ」

「そうだねえ、ステータスウィンドウを見せて欲しいところだけど……。その様子だと大丈夫そうだね、強いんだろ、あんた」

一瞬、ステータスウィンドウと言われて疑問に思ったが、ここはエ

ターナルなのだ。

おそらくは『ギヤスパルクの復活』で出来た事は可能な筈だ。
となればメニユー画面を開く感覚でステータスウィンドウを開ける
という事だ。

だが、俺はステータスを見せようとは思わなかった。

将来敵対する可能性の高い人物に情報は与えたくない。

「……愚問だ」

俺はそれだけ言って部屋を後にした。

RPGって大抵は世界存亡の危機に見舞われるよね（後書き）

基本的にキール視点でのお話なので想像以上の早さで原作一巻分は終わります。

仄暗い洞窟の底から（前書き）

とりあえず四話目投下します。

読んでる人がいるとかいないとか、そんなん関係ないっていうか俺は自分の楽しみで（以下略

仄暗い洞窟の底から

メルダの町を出る途中で学生服を着た二人組にぶつかったが、俺が話しかける間もなく「すまない」と言っただけで去ってしまった。

おそらく俺と同じで地球から来た奴だろう。追いかけてい衝動に駆られたが、今は依頼を優先しなければならない。

俺はそのまま町を出た。

一日中歩いていたので疲労はピークに達していたが、俺は宿屋で休息を取らなかった。

マリーやその仲間にはなるべく良い心象を与えておきたい。

もっとも、やつらの組織と仲よしこよしがしたいわけではない。来るべきときに備えて俺という存在への注目度を下げておくためだ。

俺だって出来ることなら善人プレイがしたいんだ！　俺は善い墮天使なんだよッ！

そのため俺は疲れた体に鞭打ってアルダ村の方角に向かっているのだ。

だからと言って徒歩で移動しているわけではない。

予想通り、と言っただけなんだが俺は問題なく『キール』の能力を使うことが出来た。

そして、俺式改造『ギヤスパルクの復活』のオリジナル職業である^{ジョブ}ダテンシの使えるスキルの一つに、テレポートというものがある。別にドラゴ。クエストシリーズのルーラみたいに町から町へと一瞬飛び、なんていう便利な魔法じゃないし、このゲーム内でダンジョン脱出効果を持つテレポートとも別物である。

ゲーム内では使用するとマーカーが出現してそれを動かした場所に即時移動というなんともピーキーなスキルだった。

俺はスキル熟練度制を組み込んでしまっていたため、スキルレベルが低い頃は本当にキャラクター2、3マス分ぐらいしか移動できなかった。

このスキルを作った俺をもつてして役に立たないと言わせる代物であつたのだ。

しかし、俺の日々の熟練度上げの成果もあつて現在のテレポートのスキルレベルは八だ。

ゲームの中では対して重要なスキルではなかったが、エターナルでは自分の半径五十メートル以内で目視しているのならどこでも瞬時に移動できるというステキ仕様へと変わった。

連続使用を繰り返した場合、理論上はどんな生物、乗り物より速く移動できる。

だが、俺の職業であるダテンシは同じスキルの連続使用ができない。

と言うのも、本来『ギヤスパルクの復活』では技スキルだろうが魔法スキルだろうがMPの続く限りうち放題のうえ「詠唱？ 何それおいしいの？」状態なのだが、俺がMPが切れたらスキル使用出来なくなるなんて嫌だ、でもスキル使い放題と言うのも味気ないと考えたために、各スキルにCTクールタイムを設けたためだ。

このCTはオンラインゲームだと良く使われているシステムだと思ふ。要するに一度スキルを使ったら次の使用までに一定の時間がかかりますよ、という事だ。

そのため俺にはMPなんて概念は存在しない。注意深く見てみると、俺の頭上の青いゲージの横にはMPではなくCTと表示されている。……さり気無さすぎてマリーに気づかれることもなかっただろう。

そしてこのテレポート、スキルレベル八でのCTは二十秒。^{クールタイム}

つまりは何が言いたいのかというと——俺は今、テレポートしては走って、CTが回復したらテレポートしてを繰り返している。^{クールタイム}格好がどうだとかそんなものは重要じゃない。そう、絶対に気にしてはいけないんだ。

日はすでに沈んで、辺りは漆黒。

光源は俺の持つているランタンだけだ。

いつもなら寝ている時間だがテレポートで移動した直後に生じる風がとても冷たく感じられて、眠気も覚めた。

そのまま移動を繰り返していると、前方に僅かな明かりが見える。おそらく、あれがアルダ村だろう。

ゲーム初期の頃は何かと印象深かったのでよく憶えている。当然スタート地周辺の地図もだ。

そして、目的地である封印の洞窟はアルダ村から見て北の林を抜けた先にあつたはずだ。

あの林は傾斜が激しく通常の移動手段では通り抜けることはできなかったが、テレポートを使える俺なら最短ルートで辿り着くことも可能だ。

俺はふっと息を吐くと、テレポートを発動し林の方角へと跳んで行った。

●○○●○○●

林を抜けると、そう遠くない位置に封印の洞窟はあった。

気を抜くとメルダの町からここまでの夜中行軍による疲れがどつと押し寄せる気がした。

眠気はない。長時間に渡って夜の冷気を浴び続けたためだ。

俺はもろもろの不調を極力気にしないようにして、洞窟の中に足を踏み入れた。

洞窟の中は等間隔に松明の土台が置かれていて、俺が近づくと中心から炎が吹き上がり、眩しすぎる光が暗がりを照らした。さすがゲームの世界だけあってまさにファンタジーだな。

照らされたことで辺りの様子が明らかになる。

内部はどうやら人工物のようで、壁画とでも称すべきものが壁一面に描かれていた。

コツコツと音をたてながらしばらく進んでいくと、不意に横の壁画が血に濡れたように朱に染まった。

赤は生き物のように蠢き、やがて大きな一つの目玉を形作る。

俺が注意して軽く腰を落とすと同時に、目玉の中心から影が沸きだした。

くすんだ色の擦り切れたコートが浮かんでいるようにしか見えないが、フードの部分が赤色に光っていることと頭上に表示されたネームからモンスターだと分かる。

ヴォイドゴースト。ゲーム序盤においては低レベルなプレイヤーの敵う相手ではないが、俺のレベルは七十七だ。塵に等しい。とはいえ俺にとってこれはエターナルにおける初戦闘だ。出来る事ならムードというものを大事にしたい。

そうだ、ここまで結局テレポートしか使ってこなかったんだ。ここは一つド派手なスキルで蹴散らしてみよう。

テレポートが使えて攻撃用のスキルが使えないことはないだろう。もしそうだったら本格的にヤヴァイ、わりと切実にゲームオーバーだ。

敬虔な俺の願いに応えてくれたのか、俺がスキル発動をイメージすると足元に光り輝く幾何学な紋様が浮かび上がった。

俺の職業であるダテンシの魔法スキルの発動待機モーションだ。

さらに背からは淫色くろくちいろの光を放ちながら双対の翼が現れる。

堕天使ついたら羽だろ？ 黒いやつ。

片翼にしなかったことが悔やまれる。あれさえあればセフィ。スの兄貴よろしくいろいろできたのに……。

しかし兄貴のようにこれで飛べるわけではない、あくまでエフェクト。

そうしている間にも壁から滲み出るようにヴォイドゴーストは数を増やしていった。だが、問題ない。

足元の魔方阵が一際大きく輝くと、弾けるように霧散する。

「ジャッジメント！」

俺が叫ぶと、群れるヴォイドゴーストを覆い尽くすほど巨大な魔方阵が展開した。

ヴォイドゴースト達は魔方阵の発する光に一瞬動きを止めたが、数秒の後に緩慢な速度で再度こちらに向かってこようとした。

そして、一匹のヴォイドゴーストが魔方阵の下から抜け出る瞬間――

――上から降った光線によって消滅した。

改めて説明する必要もないと思うが、これも俺が組み込んだスキルだ。

発動までに数秒の溜めが必要となるが、威力は絶大。それを示すようにヴォイドゴーストは次々と降りそそいだ光に焼かれて数を減らしていった。

まあ、ぶっちゃけテイ。ズシリーズのジャッジメントそのまんまだ。なんで堕天使が光属性使えるの？ とか気にしちゃいけない。

俺は善い堕天使なのだ。

なんで技名を叫んだのかにもきちんと理由がある。

どうやらスキルの類はその名称を声に出さないと発動しないらしいのだ。

俺がこの洞窟にくるまでに何度「テレポート！」と叫んだことか。決して俺が技名を言いたかったわけではないのだ。

スキルのエフェクトが終わると既にモンスターの影はなく、地面にGが散らばって煌めいていた。

俺はいそいそと拾い集めにかかった。

別に鼻が尖っているわけではないが、世の中お金は大切だ。

これだけレベル差があったから楽に倒せたが、実際ヴォイドゴースト討伐の適正レベルは四十レベル台だと言われている。

そしてRPGのお約束である弱い敵より強い敵の方がドロップが良い、というのはもちろんエターナルにおいても通用する。

その帰結として、俺の拾い集めた金額は二千Gに達していた。

メルダの町の宿屋での一泊が三百Gであることから、随分とまとまった額である。

このまま少しGを稼いでいこうか。

テレポートでかなりの時間を短縮できたから、今すぐマリーの部下と合流しなくても大丈夫だろう。

ジャッジメントのCTが回復したことを確認して、俺は洞窟の奥深くへと潜っていった。

仄暗い洞窟の底から（後書き）

ハイ、お疲れ様です。

どうしようもない決意

あれから作業ゲーよろしくヴォイドゴーストをジャツジメントで葬りまくった俺は、今回の狩りの成果を見て顔を綻ばせた。まず、やつらは合計で二万Gもの金を俺に貢いでいった。無駄遣いをしなければらく金策に困ることはないだろう。

さらに、ジャツジメントを使いまくったことで、スキルレベルが一つ上がった。

おかげで現在のスキルレベルは九、発動までの待機時間は五秒とやや短くなりCクールタイムTも三十秒ほどにおさまった。

ラッキーなのはそれだけではない。

俺がドロップ品を整理していると、その中に真っ黒な首輪を見つけた。

ペルネの腕輪。ヴォイドゴーストのレアドロップである。

効果は即死・石化無効という破格のものであり、攻略wikiのドロップ報告にヴォイドゴーストからのドロップを確認した旨のコメントが書かれた事があったが、有志達が何万という数を狩っても出なかったことから虚偽だと叩かれた過去を持つ品である。

かくいう俺も頭の沸いたやつが書いたのだと思っていたので、この腕輪の情報ウィンドウを開いた時は驚きのあまり声をあげてしまった。

しかし正直、この腕輪が手に入ったのは運が良かった。

この封印の洞窟に沸くのはヴォイドゴーストだけではない。

恐るべき即死魔法を使用するモンスター、ヴォイドバイパーが出現するのだ。

『ギヤスパルクの復活』というゲームにおいて即死魔法の脅威度は他作品の比ではない。

プレイヤーは傭兵などのNPCを雇ってPTを組^{パーティ}み、共に敵と戦うことが出来るがあくまで主人公はプレイヤーのキャラクターだ。

つまりプレイヤーが敵の攻撃を被弾して死亡した場合は即ゲームオーバーとなり、セーブしたところからのやり直しとなる。

カプ。ンの女神。生などのシステムに近いだろう。

そしてPTを組んだNPCが死んでしまったとき、プレイヤーはもうどうすることもできない。

このゲームには復活するためのアイテム、魔法ともに存在しないのだ。教会に仲間の棺桶を引きづっていても無駄だ。弔う以外の選択肢はない。

プレイヤー達が即死を防ぐアイテムを求めたのも当然の帰結だろう。この腕輪以外に即死を無効にできる効果を持ったものがなかったことも、それに拍車をかけた。

だが、ここはテレビ画面越しの世界ではない。

理解はしていた事だが、リセットボタンの存在しないこの世界でH^{リセット}
P^{ポイント}を散らしたらどうなるかと考えて身震いする。

やり直すことなどできないだろう。リセットできないのと同じで、俺には現在の記録をセーブすることなどできないのだから。

俺のいま着ている服には各種状態異常への軽い耐性効果がついているが、自らの即死を完全に防いでくれるこの腕輪とでは信頼度が違う。

可能性を減らすなどでは足りないのだ。

封印の洞窟は三層に分かれていて、俺が一つ階層を降りた三層目からヴォイドバイパーがスポーンする。

マリーの部下がいる最深部には少なくとも三層に降りなければならなかった。

最悪、ヴォイドバイパーとの戦闘を最小限に抑えて護衛対象と合流することも考えていたがそれをせずに済みそうだ。

手に持った腕輪はその重量以上の重みがあるように感じた。

右の手首に通すと腕輪は解けるように消えてしまい焦ったが、ステータスウィンドウを開くと「腕」の欄にきちんと「ペルネの腕輪」と表示されていた。

目には見えないが右手首に触れると、人肌の感触ではない金属特有のつめたさが感じられた。

俺は大きく深呼吸すると、先の層へと続く傾斜を降りていった。

途中で後ろの方から複数の人間の叫び声とどたとたと暴れ回る音がした。

何かは分からないがさっさと合流した方がいいだろう。

俺は幾分早い足取りで歩き始めた。

●
○
●
○
●

突然だが俺は男だ。

なにを当然のことを言っているのか疑問だろうが、まずは聞いてほしい。

男にはやらなければならないことと、してはいけないことがあると俺は考えている。

自分の言葉は曲げないこと。

死んだじいちゃんの受け売りで、じいちゃんがいまの政治家を見て思ったんだと。

だが、世の中うまく渡っていくためには嘘も必要なので俺はこの言葉を聞き流した。

じいちゃんも俺の態度を見て無駄だと悟ったのか、若干呆れたようすながらも笑っていた。

しかし次の言葉を発するときにはじいちゃんの顔は引き締まり、八十を過ぎ背が曲がり始めた体からは気のようなものが見えた。

曰はく、

「罪もないやつが痛めつけられているところを見て、何も感じねえような腐った男にはなるなよ」

じいちゃんが死ぬ十日前の言葉である。

じいちゃんはこうも言っていた。

「もし力があるんならそれはおめえのもんだ、好きにすりゃいい。ただどな、おめえがこの桐条源之助の孫なら話は別だ。力のあるやつが弱え奴を助ける、そうやって桐条は進んできたんだ。分かるか？ るい坊」

呼吸器を着けられいつくたばってもおかしくない状態ではあったが、じいちゃんの言葉は紛れもなく桐条グループ前会長のものだった。

俺は日常において無報酬の働きを他人に提供するような、デキた人間ではない。

目の前でクラスメートがプリントをばら撒いてしまったとしても、そのまま素通りするような奴だ。

だが、じいちゃんの言葉はそんな俺の胸に染み込むように馴染んだ。俺の内なる心が、とかの中二的な理由か、じいちゃんの最後の言葉だからなのかは分からない。

「おいっ、さっさと呪文の詠唱を教えろ！ 俺だって女に危害は加えたくないんだよッ！」

おそらくマリーの部下なのだろう、頭の上にジローと表示された男が何事かを喚いていた。手元には鉄製のナイフがきらりと光る。

ジローの長身でよく見えなかったが若い女性が体を縮こまらせて震えていた。

「い、嫌ですっ！ 私は風神ファドラに仕えるアローネ家の神官…
…これは絶対に教えられません！」

レヴィアと言う名前の薄手の服を纏った少女は、目の前の恐怖にさらされながらも瞳には確固たる意志の光が宿っていた。

ジローはその眼光に怯んだが、手のナイフを振り上げるとレヴィアに怒声を放った。

「うっ、うるさいッ！ 本当に殺されたいのかおまえっ！」

「ひいつ！」

最初の強硬な姿勢も、実際にナイフを首筋にそえられると砂の城のように崩れ去った。

むしろ俺とそう変わらない筈の少女がそんな態度をとれたことを賞賛すべきだろう。

レヴィアは顔を俯かせた。

口が微かに動いていることからなにかを喋っているようだが、ここからではその内容までは聞き取れない。

やがてジローはレヴィアの首筋に手刀を当てて昏倒させると、懷から取り出したロープで腕と足を縛り始めた。

目の前で行われている現実には、俺の頭で唐突にじいちゃん言葉がリフレインした。

どうする、俺？

ここでマリーとの契約を履行しなければならぬのか？

正直に言う、俺はこいつらの組織に手を貸したくはない。

予想はしていた、マリー達は目標のためには弱者を虐げることいとも厭わないと。

ジローはそこではまともな方だろう。

発言も人を傷つけることを恐れている風だったし、言通りにレヴィアに力をふるったのは気絶させる際の一度だけだ。

もしかするとこいつは組織の中ではしたっぱ、あるいは俺のように詳しい事情を知らないまま巻き込まれたのかもしれない。

ならばジローを説得してレヴィアを解放させ、マリー達に対抗する

戦力に加えることができるはずだ。

交渉が難航して戦闘になった場合、一度拘束して再度説得にのぞめば可能性も高まるだろう。

しかし、万が一俺がその選択をした場合の危険度は現状の数段跳ね上がる。

ジローの服装は染めたようなアッシュブロンドの髪にブレザーの制服、つまりこいつは俺と同じ地球人だ。日本人特有の名前もそれを裏づけている。

と言うことは俺の予想通りマリーの仲間には高レベルである地球出身のやつらがいることになる。

俺もその一人であるためにその力はそこのフィールドモンスターに敗走することがないほどだ。

だが、同じく高レベルのプレイヤーキャラクターが複数で来られた場合は、まずいことになる。

同程度の力を持った者同士の勝敗は基本的に数で決まるからだ。だからいまはマリー達とは敵対したくはない。

自分の流儀とリスクを天秤にかける。
どうする……どちらを選べば良い！？

すると、悩む俺の視界にはジローが巨大な扉へと歩いていくのが入った。

それはとにかく巨大だった。光で構成されたように眩しく、ときおりラグがはいったようにブレる。

そして、その巨大な扉に阻まれるように、偉容を誇る漆黒の骸骨が
——そこにいた。

骸骨は骨で形成された口を上下に動かしていた。呪詛を呟いているような様相に俺はただただ寒気を感じた。

マリーの言葉を思い出す――

『あたしが出した依頼ってのはね、このエターナルに大悪魔を復活させるための下準備のことさ。なんでもその大悪魔ってのがギヤスパルクって名前だね、エターナル各地に点在する七柱の魔神の封印を解かないとまらないらしいんだよ』

『正確には神官の娘だけどね。今は部下が洞窟の最深部で封印を解く呪文を聞きだしているところさ。……ただ、その部下ってのがどうにも鈍臭くてねエ、あたしとしては不安なんだよ』

そうだ、ジローはあれを解き放つつもりだ。

レヴィアが呟いたのも封印を解くための呪文だったのだろう。

……まずい。

直感で分かる、あれを出してはならない。

ジローは扉の前に立つと、すーっと息を吸った。

骸骨は檻から解放されるのを待ちわびるように暴れ出した。

俺は地面を大きく蹴るとジローの元へと疾駆した。

どうしようもない決意（後書き）

次回、勇者サマ登場します。

もう一人の勇者 前（前書き）

ハイ、できるだけピュアな心でお読みください。

もう一人の勇者 前

石造りの回廊を突き進む。

スピードが出すぎているためか後続とは徐々に間が空いてきていたが、それでも速度は緩めなかった。

「ちょ、ちょい待ちっ、ユーゴ！ イシユラちゃん達が追いついてきてないよ！」

息も荒くシヨウが言った。

俺は一度足を止めて後ろを見やる。

かろうじてシヨウはついてきていたが、村のみんなははるか後方だった。

「ユーゴ、ちょいペースをゆるめるべきだよ。レヴィアちゃんの事が心配なのはわかる、僕ももちろん心配さ。でも僕たちが離れた隙にイシユラちゃん達がモンスターに襲われてたらひとたまりもないよ」

シヨウが銀縁メガネを押し上げて言った。

レヴィアを助けることにばかり意識がいつていて、全員の安全を考えていなかった。

十秒ほどでイシユラ達が追いついてきた。

みんなシヨウ以上に疲労しているみたいだ。高レベルの俺達ならいざ知らず、ステータスの低いイシユラ達には無理があるスピードだった。

「すまない、焦るばかりにみんなの体力を考えていなかった」

「わ、わたしは平気ですっ！いまは少しでも時間が惜しいんです。師匠、急ぎましょう！」

イシユラは俺の謝罪をはねのけた。

村のみんなも息は荒いものの、その顔からは「レヴィアを助けたい」という強い意志が感じられた。

俺は一度うなずくと全員をぐるりと見渡してから言った。

「最深部まではもうすぐだ、急ぐぞっ！」

●
○
●
○
●

俺こといつくしまゆづし巖島勇吾は気がつくとゲームの世界に来ていた。

何が起こったのかは分からなかったが、一緒にこの世界に来ていた親友の宮本翔みやもとしょうと話し合った結果、どうやら俺たちがプレイしていた『ギヤスパルクの復活』というゲームの世界らしいことが分かった。

いつも「ゲームの世界に入れたら」と妄想していた俺はこの事態に興奮していたが、同時に頭に不安がよぎった。

（……どうやって日本に帰るのだろうか？）

現実の世界には両親や姉と妹がいるのだ。何日も帰らなかったら心

配するだろう？

シヨウはただ浮かれていたが、俺はそこまで楽観的にはなれなかった。

その後はモンスターに襲われていた村娘のイシュラを助けたことで懐かれてしまい、イシュラの住んでいるアルダ村におもむいた。代々イシュラの家系は風神ファドラの神官を務めているらしく、イシュラのとりなしもあって現在の神官でありイシュラの父でもあるオランドウさんから家に案内されて食事をごちそうになった。

だが、俺には料理の味に舌鼓をうっている暇もなかった。

イシュラの姉のレヴィアが美人だったことで、シヨウがいいところを見せようとしてモンスター退治の依頼を勝手に受けてしまったのだ。

このままモンスターを放置しておくとか村の存亡にかかわるということとで、俺も断るつもりはなかったが……。

俺達のステータスウィンドウを見てレヴィア達が口を開けて固まったり、一晩家に泊めてもらえることになったりといういろいろあったが、俺達の異世界での一日目はこうして過ぎていった。

二日目、俺達はイシュラやレヴィア、それと村の青年団の方達を連れモンスターを退治しにいった。

ブラウン管の外から見るモンスターと現実とのギャップに少々驚いたが、俺達は犠牲なしにモンスターの親玉を倒すことに成功した。見事モンスターを掃討して村に凱旋した俺達は村人たちから宴を開かれ、夜遅くまで村人たちと一緒に騒いでいた。

無礼講ということで未成年にあるまじき飲酒をしてしまい、俺は気がつくと村にあるファドラの神殿前で眠ってしまっていた。

そして、三日目に事件は起こった。

朝目覚めると、俺は神殿の祭壇前で一通の手紙を拾った。
書いた人物はレヴィアで、内容は要約すると「村を出ていく」といったものだった。

家出したレヴィアを探すべく、俺達はレヴィアに行った可能性のあるメルダの町に急いだ。

情報収集を始めると、どうやらレヴィアを誘拐した犯人がいるらしく、俺とシヨウはその依頼を出したやつが泊まっている宿屋へと向かった。

そこにいたのはマリーという名前の女で、俺達と同じく『ギヤスパルクの復活』をプレイしていてこっちにきたらしい。

そしてマリー達の目的は『ギヤスパルクの復活』で、レヴィアを誘拐したのはギヤスパルクの僕である魔神の封印を解くためだと語っていた。

俺とシヨウはマリーから目的を聞くためにマリーを追い詰めたが、惜しくも逃げられてしまった。

しかし、マリーの残していったものから、『ギヤスパルクの復活』を企む人間が組織だって動いていることを掴んだ。

俺は一抹の不安を覚えたが、まずはレヴィアの安全が先だ。

俺達はメルダの町から取って返し、一度オランドウさんに報告するためアルダ村へと戻った。

アルダ村に戻ると、大量のモンスターが家屋を、人を襲撃していた。幽鬼のような姿のモンスターはアローネ家が守護している封印の洞窟から沸いたものらしい。そしてレヴィアが連れ去られた所でもある。

俺はすぐにも洞窟に向かおうとしたが、シヨウの放った言葉で足を止めた。

「その封印の洞窟さ……出るんだよ、即死魔法つかうモンスターが……」

俺はそれを聞いて血の気が引いた。

昨日のモンスター退治はあくまで俺とシヨウのレベルが高かったから成功したにすぎない。

こちらと敵の力量差がはつきりしていて、負ける可能性などなかったからこそ大きくでられたんだ。

だが、即死魔法はマズイ。

ドラ○エのザキ、女神○生のムドオンがいい例だ。

どれだけHPヒットポイントがあろうと、どれだけ高いVETバイタリティを誇ろうとも、一定の確率でその効果が発動すれば――死ぬ。それこそあっさりと

これがゲームだったら問題はなかった、軽く舌打ちしてセーブデータをロードすれば前回のセーブポイントからやり直せるのだから。

でも、いま俺がもし、もしも死んでしまったらどうなる？

いつまで経ってもその場を動かない俺に業を煮やしたイシュラが苛立ち交じりの声で促してきたが、俺はただ「……すまない」と返すことしかできなかった。

結局、イシュラは青年団を連れ立って封印の洞窟に行ってしまった。彼らの俺を見る目には明らかな侮蔑の色が浮かんでいたが、返す言葉はついぞ見つからなかった。

シヨウはいつの間にか姿を消していた。逃げたのだとしても、俺にシヨウを責めることなどではしない。

（俺だって同類なんだ、怖いんだ！）

誰もいなくなつた広場で俯いていた俺は、気がつくと神殿へと向かつていた。

そこにはオランドウさんがいた。

驚いたことに、恐怖から尻尾を巻いて逃げだした俺を見る彼の目には、特に負の感情はみられなかった。

彼の聖職者然とした態度を見ていた俺は気がつくとき心の内を吐きだしていた。

親父に悩みを打ち明けているような、そんな気分だった。

全てを吐きだし終えた俺は、胸の内に恐怖とは違うどこか温かいものがあることに気づいた。

（そうだ、いまこそ一步を踏み出すときなんだ！ 確かに俺はこの世界ではレベル七十八のゴースナイト、とほうもない力を持つてる。だけどそんなものじゃない、俺に必要なものはそんな上辺だけのものじゃない。俺は変わる、弱い自分を脱して本当の強さを手に入れるんだ！）

俺は神殿を後にし、村人から騎乗用の動物を借りると、封印の洞窟へと手綱を取った。

●
○
●
○
●

「なんだよ、あれ……」

シヨウが震える指で前方を指差した。

石造りの回廊を走り続けること五分、俺の一步先からは土が剥き出しになっていて壁や天井の大きさは今まで通ってきたところとは隔絶するほどに広い。

そして、その部屋の最奥に、そいつはいた。

淡く輝く白い光が幾条にも重なって構成された扉。そして見上げるほど巨大なそれに阻まれる漆黒の骸骨。

頭蓋には角のようなものが形成されていて、胴体から生やした六本の腕が存在の異様さを強調している。

頭の上にはヴオイドの表示。マリーが言っていた魔神ってコイツのことか！？

扉の向こう側は暗く、どこかこの世界ではない別の場所に繋がっているようだ。

扉はちょうどこの部屋と暗がり仕切りを仕切るようにそびえ立ち、ヴオイドはどうやらその境界からは出られないようだ。

それに気づいたのかシヨウや青年団のみんなもホッと息をついた。

「おい、レヴィアがいたぞっ！」

青年団の一人が言った。

光の扉の前には三つの影がある。

一つはロープのようなもので拘束され、床に転がされているレヴィア。意識がないのか身じろぎもしない。

もう一つはブレザーの制服を着て頭上にジローと表示された男。こちらもうつ伏せのまま動かない。

ブレザーってことは俺達と同じ日本人か！？　なんでこんなところ

にいるんだ？

最後のひとりはそのジローを見下ろしている。

サンゴルドの髪は肩まで流され、背中には黒色の翼が生えていて妖しげな光を放っている。頭上に表示された名前は、キール。

羽って……人間じゃなくてモンスターなのか？

あいつがレヴィアを誘拐したのか？ならもう一人のジローはどうしたんだ？

「ユーゴっ！ きつとキールってやつが誘拐犯だよ！ 絶対そうだし！ 黒い羽って怪しさむんむんだし悪役のテンプレじゃん！」

シヨウは言うや否や部屋の中へと走り出した。

「おいっ！ シヨウ、ちょっと待て！」

俺の制止も聞いていない。

俺はイシュラ達にここで待機するように告げてから部屋へと入った。

「やいつ、おまえ！ レヴィアちゃんを放すんだ！」

シヨウの大声でキールはどうやらこちらに気づいたらしく、ゆっくりと振り返った。

中性的というのだろうか、キールの容姿は男とも女ともとれるようなものだった。

「へ？ つーかお前ら誰よ？」

鈴を鳴らしたような声でキールは言を返した。

顔には軽薄そうな笑みが張り付き、見る者の神経を逆なでする。

（モンスターでないとすると、キールは何なのだろうか？ 翼人とかそういう種族なのか？）

「おまえがレヴィアちゃんをさらったんだろ、そうだろ！？」

シヨウが怒声交じりにまくしたてる。

（焦りすぎだ！ おまえまさかこんなときにいい格好見せようとか思ってるんじゃないだろうな！？）

「えーと、確かに誘拐関連の依頼だったけど俺は――」

「やっぱりそうか、喰らえっ！ ファイアーボール！」

キールの言葉にはまだ続きがありそうだったが、シヨウの手から発射された炎弾によって遮られた。

シヨウ、おまえ何やってんだよ！？

確かに現状では一番怪しいけどいきなり攻撃することないだろう！

あわや直撃するかと思われた炎弾は、しかしすんでのところでキールが身を捻って躲した。

「ちょ、ちょっと待てっつ！ 俺は――」

「ええい、ちょこまかとう、ファイアーボール！ もういつちょ、ファイアーボール！」

キールがいくらか慌てた声色で何かを言おうとしたが、次々と射出される魔法に言葉が続かない。

俺はシヨウが魔法を発動する隙を狙って羽交い絞めにして、シヨウの動きを封じた。

「離せユーゴ！ 僕は囚われのレヴィアちゃんを救いだしてフラグを建てるんだっ！」

「やつぱりそんなことかつ！ 時と場合を考えろっ！ そして相手をよく見ろっ！ 明らかに何か話しかけてきてた——って危ないっ！」

俺はショウを押し倒す形で横に飛び退いた。

俺達が立っていた位置は何か溶かされたように挟れていた、キールが魔法を使つたみたいだ。

キールの額には青筋が浮かんでいて、口元はピクピクひくついている。

（そりや怒るよなあ……いきなり火達磨にされかけたんだから）
とりあえず話を聞いて貰うために、俺はキールに声をかけた。

「待ってくれ！ 俺達はレヴィアを助けに来ただけだ。君がレヴィアを誘拐したのでなければ危害は加えないし、謝罪もする。それで、君がレヴィアをさらったのか？」

俺が一息に告げると、キールからは毒気を抜かれたように怒気が治まった。

……ショウの方をずっと睨んでいたが。
キールは胸に手を当てすーっと深呼吸をすると、俺に視線を合わせて言った。

「まずお前らに俺からいくつか確認したい。お前らはその服装からして日本人、そもでもって『ギヤスパルクの復活』で遊んでいるうちに気がついたらこっちに來ていた、合ってる？」

「ああ、俺とシヨウは『ギヤスパルクの復活』をプレイしているうちにこの世界に来てしまったんだ。……もしかして君もなのか？」

「そそ。俺の場合は目を開けたら森の中だったんだよ」

だが、キールの容姿はどうも日本人離れしている。その前に背中に羽が生えた人間なんていない。

俺とシヨウの訝しげな視線に気付いたキールは、艶のある金髪を一房掴むと少しの疲れが混じったような表情で言った。

「ああ、俺ってこんななりだけど真正銘日本人よ？ 母さんがアメリカ生まれでさ。あと背中にくつついてんのは俺の職業^{ジョブ}特有のエフェクトね」

そう言ってキールは目を閉じた。すると背中の羽が毒々しい瘴気を放つエフェクトとともにガラスが砕けたように四散した。

目をあけたキールは先程の軽薄な表情とは一転、いくらか真剣な顔になり「そんでさ」と続けた。

「お前らはギヤスパルクを復活させようとしているやつらのことって知ってる？ こっちにきてからさ、俺はまず情報を集めるためにメルダの町の酒場に向かったんだよねえ。そこでこの世界が『ギヤスパルクの復活』なんじゃないかって確証を得た俺は、当面の宿代を稼ぐためにクエストを請けることにしたんだ。そんでさ、そのクエストの依頼人がマリーって女で話聞いたら、なんか知らないけどギヤスパルクを復活させる的なことを言ってたわけよ。当然俺は話を無かったことにしようと思ったんだけど――やられたわ。あいつ、俺のキャラクターネームを既に仲間に知らせたっぽいんだよ。そりゃ魔王の復活企んでる連中が仕事を請けたやつを逃がすわけな

いわな。俺の仕事の内容は、そこに倒れてるレヴィアを誘拐したマリーの部下の護衛でさ、状況的に請けざるを得なくなった俺はそいつがいるっていう場所、つまりこの洞窟に向かったんだ。ここまではOK？」

「ああ、というより俺達も失踪したレヴィアの搜索にメルダの町に行って、そのマリーって名前の女には会ったんだ。キールが言っていた内容を俺達にも話してくれたよ」

「へー、こりや偶然。そんじゃお前らがマリー達についてある程度知ってる前提で話すよ。話を戻すけど、依頼を請けた俺はこの洞窟を進んでたんだ。途中までは俺もやつらの犯罪の片棒を担ぐつもりだったんだけど、やっぱり気が変わってさ。俺に悪人プレイは似合わねえっての」

「それじゃあキールは——」

「俺がこの部屋に着いたとき、マリーの部下がレヴィアを脅して聞き出した魔神復活の呪文を唱えようとしてたもんで、軽くボコらせてもらったよ」

「……シヨウ」

「え、えーと——ごつゴメンナサイ！」

シヨウの謝罪を受けたキールは軽く何でも言っただけで風におどけて見せ、頭を上げさせた。

しかし、レヴィアを誘拐したのがキールでないとすると、いったい誰なんだ。

「それで、そのマリーの部下というのは一体どこにいるんだ？」

「それならそこで伸びてるジローってやつが——アレ？」

床に倒れていたもう一人の男の姿が見えない！

俺が光の扉へと視線を移すと、ヴォイドの巨躯の下で高らかに呪文を唱えるジローがいた。

「時は今！ 扉を開け、疾く開け！ 風神ファドラの名の下に」

瞬間。ヴォイドを封じていた光の扉が揺れた。

扉を構成する光の束が発する光量がしだいに弱まり、決壊したようにはじけ飛んだ後、宙に溶けるように霧散した。

遮るものが無くなった魔神は歓喜の声を上げ、それは轟音となって室内に反響した。

ヴォイドはこちらにその紅い眼光を向けると、暗がりから抜け出し悠然とした動作で歩き出した。

「ええつと。コレ、ヤバくね？ 割とマジで」

キールのキーの高い声がどこか遠いものに聞こえた。

もう一人の勇者 前（後書き）

というわけで、ユーゴ君達の行動をダイジェストでお送りしました。

基本的に僕の小説内のショウ君と原作のものでは、映画版ジャイオンとテレビ版ぐらいの違いが発生します。

もう一人の勇者 後（前書き）

ハイ、更新です。

もう一人の勇者 後

「あれ、ちょ——待て待てっ！ 俺はお前を助けてやったんだぞ！
分かるか？ 分かるよな！？ 俺は——」

必死の形相で口走るジローの言葉は、ヴォイドの指先から走った赤
光によって遮られた。

ジローの生命を表すHPゲージが削れ、一瞬で真っ白になった。
音をたててジローが崩れ落ちる。

「やばい、やばいよユーゴ！ あいつこっちを見てるよ！ ど、ど
うしよう……」

シヨウが上ずった声で言った。
ヴォイドは緩慢ではあるが、しかし確実に俺達の方へと向かってく
る。

「どうしようも何も倒すしかねえっつーの！ じゃなきゃ魔王復活
の前に俺達がゲームオーバーだ！ 全員で一斉に攻撃すんぞ！」

「分かった、せーの、でいくぞっ！ せーのっ！」

俺が合図を出したことを皮切りに、俺の剣から衝撃波がヴォイドに
走る。

シヨウが放った魔法はヴォイドの周囲に雷雲となって出現し、俺の
放った衝撃波がヒットすると同時に、雲を突き破って幾条もの雷撃
があたりに轟音を撒き散らしながらヴォイドの頭部へと殺到した。

「ジャッジメントッ！」

雷が止むと、今度は部屋の天井一面に不思議な紋様が浮き上がる。おそらくキールの魔法だろう。紋様は絶えず変化し続け、一度大きく光り輝くと、一筋の光線が降った。

見事ヴォイドの脳天に直撃したそれは、絶えることなく天井の魔方阵から降り注ぎ、地面を深く抉りながらヴォイドへ当たり続ける。土埃が舞って、それにヴォイドの姿が隠れる。

「……やった？　もしかして倒したの？　僕たち」

「ちょ、お前それはフラグだっつーの！」

視界が良好となる。

しかし、倒せたのか、という希望はヴォイドのHPゲージヒットポイントの示す現実によって打ち砕かれた。

「ウソだろ……、全く減っていない」

俺の口から思考が零れ落ちた。

ヴォイドのHPはあれだけの攻撃を浴びせたにもかかわらず、数値ヒットポイントにして二十分の一、表示に直すと僅か数ドットが削れただけだった。

俺達が軽く放心している間、ヴォイドは待ってくれることなどなかった。

落ち窪んだ、本来眼球がある部分が怪しく光り、六本あるヴォイドの腕が赤く発光する。

——ヴォイドは奇声を上げながら腕を天高く振り上げると俺達目掛けて振り下ろした。

俺が反応できたのは奇跡に近いだろう。
呆然としていたシヨウとキールの体を引っ掴み、顔から突っ込むようにして後ろへと跳んだ。

刹那。重機でビルを丸ごと押しつぶしたような破砕音がした。巨大な拳骨が軽く人を吹き飛ばすほどの風圧を発生させる。

ヴォイドの腕は一秒前まで俺達のいた位置に深く突き刺さっていた。距離にしてほんの二メートルほどの近さに。

俺達は命が助かったことに胸を撫で下ろしたが、これで身に降りかかる脅威が去ったわけではない。

ヴォイドは地中深く埋まった腕を力任せに引き抜くと、地に倒れた俺達を見下ろした。

骨で構成された顔からは感情など読み取れるはずもないが、そこにはどこか愉悅の影が見えた気がした。

「このままじゃまずい……、どうかここを抜けださない」と

「つつても、コイツのリーチの長さは半端じゃない。攻撃モーションの隙に逃げたとしても部屋の入口に着く前に後ろからドンってこ
とになっちまう」

「ええっ！　じゃあどうするのさ！？　こんな化け物僕たちだけじゃ倒せないよ！」

「一つだけ方法がないってわけでもない。　この中で一人が骨野郎の注意を引きつけてる間に残りの二人がさっさと逃げる、通称『すいっませーん、もうあなた様には逆らわないんで、一人のメガネで許してください』作戦だ」

「それって僕のことじゃん！？ やっぱりさっきのこと根に持つてるよね！？ ねえ！？」

「半分おふざけとは言え、他に作戦がない以上いまのところはこれが一番有力だぞ。さつさと別案を出さないことには——っ！ やべえ、次くんぞ！」

キールが警告を発した。

ヴォイドは腕を振り上げ、攻撃態勢に入っていた。

（くそ！ どうする、何か、何か状況を打開する案を……！）

「ユーゴさんっ！ 魔神を、ヴォイドを向こう側に追い出してくださいっ！ 私が封印の呪文をかけます！」

倒れて気を失っていた筈のレヴィアが立ち上がって叫んだ。

服が所々擦り切れ、HPゲージが数ドット削れているのを見ると、先程の風圧でダメージを受けたのか。

「本当か！？ よし何とかコイツを押し出すぞ！ ショウ！ キール！ 魔法を使ってヴォイドの動きを止めてくれ！」

「了解！」

「あいよー、なんか知らないけどお前に任すぞ、ユーゴ」

ショウとキールの手から放たれた火球と光線がヴォイドの体勢を崩させた。

振り上げていた腕の反動で大きく後ろへと仰け反る。

俺が使う技はただ一つ。

俺の職業、軍神ゴードスの祝福を受けたゴードスナイトの全職業中
ジョブ
最強の単体攻撃スキル。使用者の最大HPとMPの半分を対価に敵
ヒットポイント
に深手を与える奥義。

「ゴードスエンブレム！」

重心が後ろへと移ったヴォイドの腹目掛けて、剣を振り下ろした。
剣筋を辿るように白い光が発生し、巨大な光の剣が生成される。
矢の如き速さで射出された巨剣はヴォイドに避ける隙すら与えず、
その胸へと突き刺さる。

不安定な姿勢で光剣の一撃を受けた魔神は、骨の足では自らの重量
を支え切ることができず、部屋に向こう側に広がる暗がりへと倒れ
るように押し返された。

「今だ、レヴィアっ！」

「すべてを疾く知る風の神！ 智を力と成す風の神！ 叡智をもち
て魔を封じ、権能をもちて邪を縛らん！」

レヴィアの凜とした声が呪文を紡ぐ。
声の響きに合わせて空間から染み出るように粒子が沸きでて、こち
らとあちらを塞ぐように壁を形成する。

光の壁の隙間から覗くヴォイドはその長い腕でようやく起き上がる
と、自らを阻む境界をその紅い眼光でしばし見据えると、やがて暗
がりの奥へと戻っていった。

「もしかして……俺達、助かったのか？」

「うん、そうみたい。もうこっちには来れないでしょ。」

「ふいー、危ねえ。今度こそゲームオーバーかと思ったね、俺は」
俺を先頭に、全員で一様に安堵の言葉を発する。

「ユーゴさんっ!」

「師匠ーっ!」

脅威から逃れられた安心からか、俺の胸に飛び込んできたレヴィアの感触も、ずっと入口で震えていたイシユラがこちらに駆けながら俺を呼ぶ声もどこか遠いものに感じた。

もう一人の勇者 後（後書き）

これでユーゴ君視点はおしまいです。

貝塚自身が複数のキャラの性格や口調を小説に反映できないという点が主な理由です、ハイ。

こうして俺は旅のお供を見つけたわけです

【こうして俺は旅のお供を見つけたわけです】

見事、ヴォイド大先輩を撃退した俺達は、いまアルダ村にあるイシユラ、レヴィア姉妹の家の前にいる。

「おーい、いつまでそこに突っ立ってるつもりだよ、こういうのは時間が経てば経つほど行き辛くなるんだっての」

「お、おいキール、押すなって。もうちょい、あとちょいで決心がつくから!」

そして誘拐犯ことジローが家の中に入るのをしぶっていて、俺がそれを急かしているという構図がある。

何故こんなことになっているのか、これを説明するにはそう、ヴォイド撃退の直後まで遡る必要がある。

●
○
●
○
●

「本当に済まない……じゃあ、俺はもう行くよ」

ヴオイドを撃退した俺達は、この誘拐の実行犯であるジローから話を聞いていた。

死んだと思っていたジローだが、実は少し、本当に一ドット分ではあるがHPゲージに赤ラインが残っていたのだ。
ピットボイント

意識が戻ったジローは涙とともに今までの謝罪をしてきた。

どうやらジローも『ギヤスパルクの復活』プレイしているうちにこの世界に来てしまったらしく、知り合いもおらず心細くなったところにマリーから『地球に帰る方法がある』と聞かされたようだ。

悪い事とは知りつつも元の世界に帰りたいという願望に心が負けてしまい、依頼を請けたらその方法を教えるというマリーの言を信じてメルダの町にいたレヴィアを誘拐してしまったとジローは語る。

そして今、誘拐したという負い目からかダンジョン脱出用の魔法が込められたスクロールをジローは開こうとしたところで、

「ちよい待ち、どこに行くのよ？」

俺はジローを引き留めた。

「えっ？」

「迷惑かけたんっしょ？　なら親御さんに頭下げなきゃ、それでもつて二、三発ぶん殴られてこいや」

迷惑をかけたのなら謝る。これは当たり前だ。
もちろんジローを引き留めた理由はこれだけじゃない。

おそらくマリーはジローの情報を仲間に伝えているだろう。いや、それはほぼ間違いない。

ならばジローが単独で行動した場合、マリーの仲間（ジローの話だとマリーが教団と言っていたらしい）に見つかって高確率で消される筈だ。

俺はジローの無事を思っていないわけではないが、どちらにせよ魔神が復活しなかったことは近いうちにマリーや教団の耳に入るとなれば、任務に失敗したジローはもちろんのこと、俺も教団から狙われるだろう。

どこから情報が漏れた場合はユーゴやショウも同じく目をつけられる。

こうなれば俺はとことん教団とは敵対しなければならぬ。
そのためには仲間が必要だ、それも高レベルの者が。

教団に高レベルのプレイヤー達がいるのなら、俺達も数を揃えて対抗する。

これから俺はその仲間集めに各地を回らなければならない。
なら個人で動くよりも二人以上でいた方が安全だ。

「で、でも俺は――」

「いいからつべこべ言わずについてこいやつ！」

●○○●○○●

「痛っ、あー、すごい腫れてる……」

結局ジローがレヴィアのお父さんへ謝罪するまでに村の青年団による厚い歓迎があったため、いまのジローの顔はアンパ。マンよろしく腫れあがっている。

見ていて「オラツ、新しい顔つけてやんよっ！」とか言っただけボールをぶつけたくなるのは俺だけじゃない筈だ。

「へへっ、こんなに殴られたのって親父とケンカしたとき以来だな」

傷は増えたが、ジローの顔は憑き物が落ちたように晴れやかだ。

（中途半端に慰められるより、いつそ殴られた方が前に進めるタイプだな、コイツは）

「ありがとな、キール。俺、お前が引き留めてくれなかったら今回のことでずっとうだうだ悩んでたと思う。うん、きっとそうだった」
なんだろう。

こう、面と向かって礼とか言われたことなんてなかったからなんか、なんかすごい恥ずかしい。

別に俺が何か中二臭いこと言っただけじゃないのに。

「本当にありがとう、キール」

（やめろっ！ 俺にそんなキラキラした眼差しを向けるんじゃないやねえ！ あと俺はお前のメンタル面まで考えてたわけじゃないんだよ！ とりあえずコツチに引き込んだこう、とかそんな感じだったんだ！ 俺をこれ以上居た堪れない気持ちにさせるんじゃないよっ！）

「それでさ、キールがさつき言ってたことなんだけど。教団と戦うための仲間を探す旅、それ俺にも参加させてくれないか？ いや、駄目だって言われてもついていくぞ！ 俺、ちゃんとした形でアルダ村の方達に罪滅ぼしたいんだ、教団はアルダ村の人達にとっても危険だろ？ だったら教団と戦うために俺も協力したい。……どうかな？」

俺は大企業のボンボンということで、当然友達付き合いもそれに見合ったやつらとだった。

だけどそいつらはやっぱり俺のことをどっかで桐条グループの桐条瑠依きりじとしか見ていなくて、結局プライベートまで仲良くなったやつなんていなかった。

だからだろうか。

この世界じゃサザエさんも見れないしネットだってできない、でもここで俺は桐条瑠依きりじじゃなくてキールだ。

現にジローは俺のことを桐条グループとは別のところで見ていて、そんな俺に「ありがとう」って……。

「お前が言わなくても俺は引きずってでも付いてこさせたっての。てーかそのキラッキラした顔ヤメロ！ なんてきれいなジャイオンみたいになつてんだよ！ 言っとくけどお前の罪は一生レヴィアさんの心の中に残るからな、コレを忘れんなよ！」

「お前なんで人の傷口を抉るようなこと言っただよ！？ 俺いま」

こつからがんばろう』みたいな感じだったじゃん！　TOAでいう断髪イベント並みに邪魔しちゃいけないところだろ！？　いま！？」

ジローが何か言っていたが俺はとりあえず今晚の宿であるレヴィアの家に行くことにした。

この日、俺は日本にいたころよりも寝つきが良かった気がする。そういえばほとんど丸一日寝ていなかったことを思い出したが、それは別の理由であるような気がした。

●○○●●●

「それじゃあキールとジローは別行動なの？」

「そーいうこと。俺とジローはあちこちまわって教団に対抗する仲間を探して来る。ユーゴとシヨウは昨晚話したように王都に行くんだろ？　もしそっちで日本人に会ったらできるだけ協力を取り付けるようにしてくれ」

「ああ、分かってる。そっちも仲間探しががんばってくれ。ただし、マリーのような教団の人間には気を付けてくれ。名前と服装だけだと判断出来ない可能性がある」

「俺が昨日魔神の解放に失敗したことは既にマリーあたりから教団に伝わっていると思う。マリーと接触した以上、ユーゴとシヨウの

名前も同時に知られたと考えていい。そっちも油断するなよ」

俺とジローはアルダ村の入り口にいる。

時刻は早朝。

まだ日すら見えておらず、そらはうす暗い。

わざわざ村人を起こす必要がないと思った俺達は、ユーゴ達にだけ出発することを告げたのだ。

そしていまは、昨晚四人で話し合ったことの確認をしていたところだ。

昨晚の会合で分かった情報を整理しよう。

まず、俺はこの世界が『ギヤスパルクの復活』の中という認識だったのだが、どうやらその考え方が違う可能性が出てきた。

考えてみれば当然のことなのだが、ゲームの外からでは食べ物の味など分かる筈がないし、当然その匂いなんかもそうだ。

NPCと思って接してきた村人達の行動もプログラムに組み込まれているとは思えないほど緻密で感情的だ。

そして、いま俺達はそれらをしっかりと感知することが出来る。

……まあ、これだけでは確証足りえないので、一旦保留ということになった。

次はゲームの世界とこの世界の具体的な差異についてだ。

この情報は俺とショウが封印の洞窟になかった筈の部屋ができていたことから気付いたことだ。

魔神ヴォイドが封印されていた部屋は、ゲーム中どこにもなかったものだ。

これがゲーム開発者の故意なのかは定かではないが、俺はどこか作為的なものを感じた。

そして今のいままで考えもしなかったのだが、『ギヤスパルクの復活』をプレイしているうちにこの世界に辿り着いた、これに開発者が関与していないことなどあるのだろうか。

もしかすると今回の事件に父さんや兄さんが関わっているのかもしれない。

俺はこのことをユーゴやショウ、ジローにも話さなかった。

まだ確定などしていないということと、身内が犯人なのかもしれないという負い目のどちらからなのかは分からないが。

考えるているうちに頭の中がぐるぐると複雑になってしまったので、俺は一度思考を放棄した。

「そんじゃ、俺達はそろそろ行くから。またどこで会ったときは情報を交換しよう」

「またな、ユーゴ。ショウ。あと、君達からもう一度レヴィアさんに伝えてくれないか『俺は自分の罪を忘れません、罪滅ぼしになるとは思っていませんが、教団という悪に立ち向かうことでアルダ村の皆さんの平穏を守りたいと思っています』……ちょっとクサイ気もするけど、これでいいか」

「ああ、確かに伝えておく。二人とも道中気を付けてな」

「うん、レヴィアちゃんもそんなに怒ってはいないみたいだよ。どっちかっていうと青年団のジャッコーとかティギーとかが……言ってるって怖くなってきた」

俺とジローはユーゴ達の見送りを後ろにアルダ村を出発した。

目的地はここからさらに東、砂漠を越えた先にある商業都市ハンプ
ルク。

早朝の冷たい空気が肺に浸透して体中に清涼感が溢れる。
俺達は打倒教団というデカイ目標を掲げた旅を始めた。

こうして俺は旅のお供を見つけたわけです（後書き）

ハイ、お疲れ様でした。

これで原作一巻までのお話は終了となります。

予想以上に早かったと思う方もいらっしゃるのではないのでしょうか？
貝塚は物語上必要となる場面以外では他キャラへの視点移動はほとんどしません。

そのため、視点変更しない場合はこのような感じになります。
もし、他キャラ視点での話をもっと読みたい、という場合はご一報下さい。

明言はしませんが、極力そういう風に努力したいと思います。

一章終了時の墮天使サマのステータス（前書き）

需要あんのか、コレ？

まあ、書いてしまったものは仕方ありません。

興味のない方はへえー、てな具合でお流しください

一章終了時の堕天使サマのステータス

NAME キール
Class ダテンシ
AGE 16
SEX 男性
レベル
LV 77
ヒットポイント
HP 807
マジックポイント
MP ー
キール君は勝手にソフトを改造したため自キャラ限定でCT制になっています。

ストレングス
STR 58
バイタリティ
VIT 530
デクスタリティ
DEX 291
アジリティ
AGI 101
インテリジェンス
INT 919
ウィズダム
WIS 939
ラック
LUK 49

装備

胴 サザンクロス 初期装備 全状態異常に軽い耐性あり。
腕 ペルネの腕輪 封印の洞窟にてオ。Qことヴォイドゴースト君よりドロップ。即死・石化への完全耐性持ち。
足 家庭用スリッパ あなたの足元を温めます。タンスの角に足の小指をぶつけるのを防ぐ。

コメント――

本当は本編の文章内で表現できればいいんだけど、いかんせん私の拙い執筆力では無理デスた。
キール君の職業は完全な魔法職です。というより殴りスキルを持つておりません。

エク。デス先生並みのVITの高さとAGIの低さを誇る移動砲台的な、そういえばテレポート使えるわコイツ。
STRのしょっぱさは他職の追隨を許しません。おおよそ学校の掃除の時間帯で、自分の机を運ぶのにひーこら言うレベル。
ただこれだけ見ても、原作持っていない人にはいまいちよく分からないと思うのでメガネの魔法使いと比較。

NAME ショウ
Class ウォーザード
AGE 16
SEX 男性
レベル
LV 58
ヒットポイント
HP 408
マジックポイント
MP 1197

ストレングス
STR 184
バイタリティ
VIT 290
デクスタリティ
DEX 123
アジリティ
AGI 209
インテリジェンス
INT 423
ウィズダム
WIS 778
ラック
LUK 86

装備

高校の制服 当社独自の製法により通気性抜群！あなたの快適な
スクールライフをサポートします。
古びた革靴 レヴィアのお父さまより物乞い。スニーカー派を主
張するシヨウ君を持ってしてぴったりフィットの履き心地と言わし
める隠れた晩品。

コメント――

言わずと知れたドラ。エでいう賢者ポジ。

キール君とステータス差が激しいのはレベルの差の影響です。

しかしこの段階のシヨウ君にSTR^{ストレングス}が大敗。ちなみにこの数値は学
校でちよつと自慢できるレベル。

LUK^{ラック}も同じく低数値。薄幸なのはそれ相応の哀^{あい}を背負っているか
らです。

ステータスの影響は、たぶんINT^{インテリジェンス}が魔法攻撃力、WIS^{ウィズダム}が魔法防
御力だと思う。

――以上。

幕間——とある幌馬車にて（前書き）

今回はびっくりするぐらい短いです。

幕間——とある幌馬車にて

街道を一台の馬車が車輪の音を響かせて走っていた。道は整地が不完全らしく、馬車はときおり何かに躓いたように跳ね上がる。

それでも馬車は道を外れることなく、ただ前へと進み続ける。

辺りは既に日が落ちて、空は曇り、月すら見えない。

馬車の視界を照らすのは、御者台に取り付けられたランタンだけだ。光源に照らされた馬車を引く動物は、馬の三倍はあるかという大きさで、頭には螺旋状に捻じれた角が二本、六本の足は人の胴ほどの太さがある。

動物が進むと破砕音と共に足元の土が抉れていく。先程からの馬車の揺れはどうやらこれが原因のようだ。

動物の首元には丈夫そうな縄が巻き付いていて、それは御者台まで伸びている。

しかし、御者台には人の姿はない。

独特の形状をした金属製の取っ手のようなものに縄が巻き付いているだけだ。

馬車の中から人の声が聞こえてくる。

御者台から木製の戸を挟んだ先には、二つの影がある。

天井付近に止まる光球が内部を昼間のように照らす。

「昨日、おもしろい奴に会ったよ。もう、本当にあんたと瓜二つ。顔だけじゃ見分けがつきやしない。キャラクターネームが表示されてなきゃあんたの名前を呼んでたところさ」

馬車の薄い壁に寄りかかった女が、腰元に吊るした翡翠色の剣を撫でながら言った。

黒髪は夜の闇のような漆黒、胸元と腹部の大きく開いた服装は蠱惑的な雰囲気醸し出している。

「そうか、それで……マリー。そいつの名前、何て言うんだ？」

声は男とも女とも取れるものだった。

そしてそれは容姿の面でも同じだ。

洗いたてのような白いローブ、首からは銀のロケットが下がる。

髪は染めたものではない天然の金色、顔は無表情ではあるが柔和で女性的な丸みがある。

喉元に小さな突起があることから、やっと男性だと分かるような人物。

男は木張りの床に胡坐をかき、マリーを見上げるような形で、そう返した。

「名前もあんだと一字違い。確か……、そう。キールって奴だったよ」

マリーは軽く欠伸をしながら、そう返した。

その言葉に男は愉しそうな、それでいて少し寂しそうな表情を零す。そして胸元のロケットを開けるとしばしそれを見つめ、やがてゆっくりと閉じると元の位置に戻し、すぐに何もうつさない顔になる。

「……もしかして知り合いかい？ そうだったんなら残念だったねえ。そいつ、教団の邪魔になるってことで、あたしが今朝方組織に情報を送っちゃったよ。他にはユーゴとショウ、後はジローって奴が指名手配されてるねえ。とにかく、今回の件で目的の達成は遠の

いたんだ。あいつらには然るべき報いってのを受けて貰わないとねえ。……で、結局あんたとはどういう関係なんだい？」

「別に、大した関係じゃない。あいつはただの——」

男が何かを言おうとしたとき、車体が大きく跳ねた。

室内に静寂が降りる。

その後、マリーの問いかけにも、男がそれ以上は口を開くことは無かった。

幕間——とある幌馬車にて（後書き）

いきなり文体が変わったのでびっくりされた方もいらっしゃると思いますが、次話からは元に戻ります。

そして俺達はオアシスを求める（前書き）

というわけで、二章に入りました。

ここから先、しばらくはオリルートが続きます。

張った伏線は後々回収しますので、ご安心召されよ。

そして俺達はオアシスを求める

じりじりと太陽が肌を焼く。

アルダ村を出てからかれこれ半日以上は歩き続けている。

そのため、もう既に口の中はカラカラで、唾すら出てこないといった感じだ。

腰に下げた水筒を見てみたが、水の一滴も入っていない。

俺とジローはアルダ村を出て東に向かった。

人の多いところに『ギヤスパルクの復活』プレイヤーがいるかもしれないという考えの下、ゲーム内でもわりと大きな都市だったハンブルクという所に行くためだ。

この辺りの地理に関してはゲームのマップ情報としてではあるものの、まだしっかりと記憶に残っていたのだ。

しかし、そのハンブルクに行くには間に広がる砂漠を越えなければならぬ。

ゲームをプレイしているときには「ちょっとながいなあ」くらいの感想しか持たなかったのだが、実際に自分の足で歩いてみるとそんなのんきな考えは消し飛んだ。

まず、暑い。

いくら広大な砂漠だろうと邪龍が住まう火口の近くだろうと、テレビ画面の中ならどこだって行けた。

そりゃ、暑いとか寒いというようなゲームのキャラクターの五感など現実にいるプレイヤーが感じるわけがないのだから、当たり前のことなのだが。

だからこそ、いわゆる危機感というものが薄かった俺達は、砂漠越えなんていう大事にも水と少しの食糧を持つことしかしなかったの

だ。

俺とジローはそんな過去の甘い自分を呪った。

ゲーム内の尺度を現実のものに換算するとどうなるのか。俺達はいま自分自身の体でもって、それを体験していた。

「……暑い、というより全然終わりが見えないんだけど……」

自分の手で日差しから顔を守るようにして覆いながら、ジローが俺と同じように空の水筒の中を覗きつつ言った。

コイツも俺と同じく砂漠を甘く見ていたやつだ。

できることなら過去に戻りたいとでも言いたげな顔である。

「……そりゃーそーでしょーよ、砂漠なんだもん」

言いながら俺は服の袖に隠し持っていた水筒を取り出し、ちびりと飲む。

「あれ？ キール？ お前それ何もってんの？」

「へ？ 水筒だけど何よ」

「お前さつき水持っていないって言ってたじゃないか！ ちょっとそれ俺にも飲ませろっ！ もう、カラッカラなんだよっ！ さつきから口の中に砂入ってきてんだよ！ 一口でいいからっ！」

「……ハイ？ すんませんけど、この状況において水は福沢の兄貴並みには価値がありますよ？ そーれが恵んでもらうやつの態度なんですか？ ん？」

ジローは「くそっ……！」やら「何で俺が……」やらばやいていたが、結局は俺に頭を下げてきた。

「……キールさん、申し訳ありませんが水を少し分けていただけませんか」

「あ、わりい。いまの一口でなくなっただわ」

しかし、ちょうど俺がたったいま飲んだ一口で水筒が空になってしまった。

（いや、悪いと思うよ。でもさ、結局俺が恵んだところで手に入るのは野郎の笑顔だけじゃん。割に合わんと思うのよ）

「キール！ お前マジで許さねえからな！ 俺と同じ苦しみを味わえっ！ バーニングエア！」

ジローが魔法を唱えると、俺の周囲に熱風が吹き荒れる。本来は敵のターゲットを受け持つときに使う魔法で、俺へのダメージはないのだが……。

「暑ッ！ つーかむしろ熱ッ！ おいジローテメエコノヤローっ！」

ダメージ自体はないものの、とにかく熱い。

ついさっき潤したはずの喉も、すぐさま渴きを訴てくる。

「ふんっ、これで対等だろう！ いい気味だな、キール？」

「お前、その顔ヤメロッ！ ニヤニヤすんじゃないっ！」

そんな感じで、俺達が砂漠を越えられるのにはまだまだ時間がかかりそうだ。

●
○
●
○
●

砂漠というものは厄介なもので、昼は灼熱が如き暑さを人々にもたらし、夜は凍りつくような寒さを振りかざす。

実際に凝固点を下回ることもあるのだから、あながちこの表現も間違っていないだろう。

日がだんだんと傾き、俺達がそのことを思い出し焦り始めたところにそれは見えてきた。

「キール。あれってオアシスかな？ 水が……、水があるんだけど」

「ジロー、どっちを向いてんの？ そっちは砂しかありませんよ？」

直径四十メートル程の泉と、それを囲むようにして小さな集落がある。

さらには、大小さまざまな茶褐色の瓜みtainなものが生った畑のよ
うなものまである。

砂漠は人が住みにくいというだけで決して生活できないわけではない。

目の前の泉のように、地下水などの水源があれば農業だってできるのだ。

とりあえずジローに水を飲ませてやらないといけない。

俺も口の中が砂だらけだし、さっさとゆずぎたい。

ただ、オアシスの水って勝手に飲んでいいものなのだろうか？

砂漠での水の価値がいまいち分からないことだし、一応聞いてみようか。

集落とはまったく逆の方向を向いているジローの制服の袖を引っ張って、俺は周りの建物の中では一番立派なところを目指して歩いていった。

●
○
●
○
●

「……ハイ？ おーいおっさん、寝ぼけてんの？ ふざけんのは顔だけにしてくんない？」

「何度言っても無駄だぞ、若造。コップ一杯で八千^{ゴールド}G、これは何を shit ったって変わらない」

一軒だけレンガで造られた建物には、いかにも商人といった風貌の男がいた。

男はこのオアシスの権利者らしく、水は大事な商品らしい。

俺は水売ってくれと鬱陶しい髭を伸ばした目の前の男に言ったのだが、男は水はコップ一杯で八千Gゴールドという条件を提示してきた。

封印の洞窟での収入がいくらあるので買えないことはないのだが、高すぎではないだろうか。

足元を見ているのかもしれないし、もしかしたら本当に相場がそんなのかもしれない。

しかし、これから何があるか分からない以上、できるだけ持ち金は減らしたくない。

そういった次第で、俺はヒゲ男とかれこれ十分近くは交渉を続けている。

だが、ヒゲ男は頑として値下げする気はない。

いよいよもってどこか遠くに行ってしまういそうなジローを見て、俺はこの金額での購入を決定しようとしたのだが、

「こんばんはー！ ガンジェフさん、私たちの準備は終わったのでいつでも——あれ？」

入口から聞こえてきた女性特有のソプラノボイスによって止められた。

俺は声の聞こえた方を見て、ゴクリと唾を飲んだ。同時に口の中の砂も一緒に喉を下ってきたが、それすら気にならなかった。

眼前には二つの巨峰がそびえ立っていた。何がとは言わない。言わずとも分かる筈だ。

動くたびに揺れるそれは、男なら誰だって目がいつてしまうと思う。それは、善い堕天使である俺をもつてしても同じだった。

「ガンジェフさん、またぼったくろうとしてました？ ここの水は公共の物なんですから、もうやめてくださいね」

ツバ広の上に尖った帽子をかぶった女はガンジェフ、つまりは目の前のヒゲ男にそう言った。

ヒゲ男はチツ、と聞こえるように舌打ちすると、俺に「勝手に使え」とだけ言って、扉を乱暴に開くと家から出ていった。

というより、このジジイ俺を騙しやがったな、クソガツ。
差し出しそうになったGを再び懐ゴルトに戻し、女に視線を移す。

女はさながら魔女といった風な格好だった。

頭上に表示されたキャラクターネームはリサポン……。

（ん？ リサポン！？ こいつもしかして日本人か！？）

リサポンは床にだらしく寝そべるブレザー姿のジローとネーム表示を見ると、一度ぼんつと手を叩くと俺の方に向き直ってその血色の良い唇を開いた。

「ねー君。ちょっと時間いいかな？ 話したいことがあるんだ」

そして俺達はオアシスを求める（後書き）

誤字修正は、見つける毎に随時更新修正していきます。

巨峰と絶壁（前書き）

サブタイトルで、ギャグかマジかの判別余裕です。

巨峰と絶壁

俺とジローはオアシスで浴びるように水を飲み、服の内側に入り込んだ砂を落とした後、リサポンというキャラクターネームの女に連れ立って集落の端にある木造の小屋へと入っていった。

ここまでリサポンは絶えずこちらに無害そうな笑みを向けてきたが、ユーゴ達に注意を促したように教団関係者である可能性は捨てきれない。

リサポンなんていうあからさまなキャラクターネームも怪しいといえは怪しい。

魔神ヴォイドの封印が解かれなかったことが教団関係者に伝わっているとなると、俺とジロー狙った教団の刺客、という可能性も無きにしも非ずだ。

とりあえず油断はしない方がいいだろう。

小屋に入ると、かび臭い臭気が鼻を刺した。

灯りは天井に吊るされたランタンだけで、薄暗い室内はかろうじて部屋の中央だけが見える、といった様子だ。

リサポンが「ライト！」と魔法を唱えると、その白い指先から光球が飛び出し、数歩分離れた空中で制止すると風船が破裂したように拡散し、光り輝いて暗い室内を隈なく照らした。

「あ、戻ってきたんですか、リサさん。……あの、そいつら誰ですか？」

奥の方から女の声が聞こえる。声質はシャープな感じで、勝気そうな印象を受ける。

眩い光源で照らされた髪は燃えるように紅く、腰まで流したロングが揺れる様は炎の動きを錯覚させる。
頭上のネーム表示はアス力。

「えーと、ガンジエフさん呼びにいったときに会ってね。新しいメンバーになる……かはまだ分からないんだけど」

「ふーん。まっ、アタシとしてはどっちでもいいんですけど。時間もないことですし、さっさと要件だけ話しちゃいませよ」

赤髪の女、アス力が俺達の方に視線を動かすと、少し吊り気味な目を軽く瞬き、

「あんた達、旭日騎士団きよくじつきしたんに入りなさいっ！」

俺達に宣言した。

「……へ？」

俺とジローが同時に間抜けな声を上げる。

リサポンが手を額に当て、呆れたように長い息を吐いた。

アス力だけはどうかと言わんばかりにやりきった表情をしている。

（旭日騎士団きよくじつきしたんってなんだ？　と言うより何でコイツはどや顔を向けてくんだ？　なんか知らないけどイライラすんだけど）

このままでは事態が進展しないと思ったのか、リサポンが「ねえ」と俺達に話しかけてきた。

「君たちは砂漠を越えてどこに行くつもりだったのかな？」

突然の質問にジローは俺に「どうするんだ？」とでも言いたげな目を向けてくる。

ジローも現在の俺達がどれだけ危険な立場にいるのか分かっているのだろう。

一度教団の脅威を肌で感じた身だから、俺以上に油断はしていない筈だ。

俺達が教団の目論見を潰したことがマリー経由で教団の連中に伝わっていた場合、こいつら日本人が教団の手先である可能性がある。

まだ会ったことのあるプレイヤーの数が少ないため、具体的なステータスやレベルの平均が分からない。

もし、プレイヤーが標準で七十レベル越えだったりしたら、俺達は単純な物量の差で敗北する。

それは、同時にエターナルでの死と同義だ。

だが、俺とジローが二人で行動している場合はそれほど危険な事態にはならない。

俺のスキルの一つであるテレポートなのだが、スキル発動の瞬間に別の対象、つまりはジローを触っているとジローごと瞬間移動できるという事実を砂漠を歩いている途中で発見した。

このことに気付いた俺達は、ここまでの道中の大半をテレポートで越えてきたのだ。

だから、平野など見晴らしの良い場所で教団の連中に囲まれたとしても、目視できる場所に瞬時に跳べるこのスキルがある限り、俺達は容易に包囲網から脱することが出来るのだ。

さすがに洞窟のような密閉された空間に連れ込まれ、大人数で襲い

掛かられた場合はその限りではないが。

「俺達はハンブルクへの行程でここに立ち寄ったんだ。そんでさ、お前たちも日本人だろ。さっきから内容がよく掴めねえんだけど。とりあえず、旭日騎士団きょくじつきしだんつてなによ？」

「それについて詳しい説明をしたいところなんだけど……。あたし達、いま人を待たせてるんだ。あたし達はその人がハンブルクに行くまで馬車の護衛をするんだけど、よかったら君たちも来てくれな
いかな？ 詳細は馬車の中で話すよ。どうかな？」

ジローとすかさずアイコンタクト。

旭日騎士団きょくじつきしだんという単語の意味が気になる。

（教団とは別の勢力なのか？ それとも……）

「りょーかい。行先が同じなら願ってもない話だしな」

「話は決まったようね。なら、さっさと行きましょ。こんな陰気なところ、早く出たいし」

俺が了承の旨を返すと、アスカは一人でさっさと小屋から出て行ってしまった。

リサポンがアスカの後に続き、俺達に手招きする。

俺達は小屋を出ると、リサポンの後に続いてオアシスの入口へと歩いていった。

●○○●

三台の馬車が停まっていた。

荷台に山のように積み上げられた果物は商品なのだろうか。

馬車の周りでは三人の商人風な男が手元の紙と荷物とを見比べ、しきりに頷いている。

そして、そんな男達に怒声を飛ばしている男が一人。

先程、俺に本来無料である水を法外な値で売りつけてきた男である。キャラクターネームはガンジェフ。

俺とジローの数歩先を歩いていたりサポンはガンジェフに近づき、何事かを話すところに戻ってきた。

「もう少しで準備ができるみたい。三十分ぐらい暇になるから、さっきの話をしちやいたいんだけど……。どうする？」

「ああ、頼むよ。キールもそれでいいよな」

かわいく首を少し傾けたりサポンが聞くと、ジローが了解する。ジローの確認に俺は頷く動作で了承を返した。

「じゃあ、あっちの広場に行こっか。アスカちゃーんっ！ 行くよっー！」

リサポンが声をかけると、荷台の上からアスカが慌ただしく「い、今行きますっ！」と返し、そのまま飛び降りようと縁に足を掛け、

「う、うみやああああアアアアツツ!!」

バランスを崩し、奇声を上げながら落下した。頭から。

俺とジローはただ呆然と立ち尽くすことしかできなかった。

リサポンが「あちゃー」といいながらも、駆け寄って回復魔法を唱える。

「な、なあキール」

「なんだい、ジロー君」

「こいつら本当に教団の人達なのか？ 俺、だんだん警戒するのがバカらしくなってきたんだけど……」

「奇遇だね。ちょうど俺もそんなことを考えてた」

「だったら、この人達も仲間に誘うか？ どこか抜けてるみたいだけど、プレイヤーならレベルは高いだろ」

「そうだね、ジロー君。けど、一旦話を聞いてからだ。さっきアスカってやつが口走ってた旭日騎士団きよくじつきしたんって単語。あれの意味を聞いてからでも遅くはねーよ」

「そうだな。で、できれば一緒に旅とかしたいよな」

「ジロー君、ジロー君。鼻の下伸びてまっせ。と言うより俺が気付いてないとも思ったかッ!? 興味無い振りして横目でチラッチラ見てたっしょ？ そんな君に『おっぱい大臣』の称号を授けよう。」

どう？ 嬉しいっしょ」

「ち、違うつて！ …… いや、違わないけど——それを言うならキールだって興味あるんだろうっ！？ 巨乳ッ！？」

「確かに俺も巨乳は好きだ。だけど、俺はそれを表には決して出さない。それこそ俺が善い堕天使と呼ばれる所以だ」

「……中二病が」

ぼそりと呟いたジローの言葉を、俺の耳は一言違わずしっかりとキャッチした。

今コイツなんて言った？

俺は決して中二病じゃない。

ただ、ちよつとだけ天使とか悪魔とか、あとついでに魔眼とかに興味がほんの欠片ほどあるだけなんだ。

えっ、というより、大体俺と年代のやつらってそういうのが好きなんじゃねえの？

今まで上っ面だけの友達しかいなかったから、そんな話とかしたことなかったし。分かるわけないっしょ、そんなん。

いいじゃん、別に。ゲーム内で堕天使になったって。

TOS（テイルズオブシンフニア）の天使とか憧れるしね。あとイ。スモ。堕天使もまた然り。

だけどさ、もしかして俺って皆にそう思われてんのかな……。

そつえば、桐条家で正月、俺の実家に集まったときとか、親戚の女の子が憐れむような目をしていたような……、俺に。

「あれっ。キール君どうしたの？」

「ああ、キールは今自分の中の何かと闘っているんです。こいつは俺が背負っていくんで、行きましようか」

戻ってきたリサポンの俺を心配する声も、ジローのちよい上からの腹立つ声も、アスカが俺の脇腹を蹴ってくる衝撃も、地面に蹲った俺には遠いものに感じられた。

●
○
●
○
●

ジローに運ばれた俺が来た場所は、集落の中心にある泉に程近い場所にある広場だった。

水の近くだからか気温が幾分低く、そして夜も近いことから、涼しいというよりは寒いといった感じだ。

俺とジローがベンチに腰掛け、リサポン達が対面のベンチに座っている、というのが今の構図だ。

「それじゃあ、自己紹介から始めましようか」

リサポンが縦に伸びた魔女っぽい帽子を揺らしながら、そう言った。アスカもそれに頷き、俺とジローも黙って首を縦に振ったことで、リサポンがやおら口を開く。

「改めまして、旭日騎士団^{きよくじつきしだん}団長、リサポン。レベルは六十で、職業^{ジョブ}はウィッチだよ。よろしくう」

「旭日騎士団拠点建造兵、アスカ。職業はレベル五十三のビルダー」

リサポンに続いて、アスカが腕組みしながら言う。

しかし、分かったことは頭上に表示されているキャラクターネームと職業^{ジョブ}だけだ。

その前の役職名に関しては、そもそも俺達が旭日騎士団^{きよくじつきだん}という単語が何を指すのかを知らないために意味をなさない。

「ちょっと待ってくださいっ！　そもそも旭日騎士団^{きよくじつきだん}って何なんですか？　それが分からないと話が進まない」

ジローが当然の疑問を呈した。

リサポン達の団長や拠点建造兵なる単語から、組織的なものだと推測できるが……。

「そうだね、まずはそこから話そっか。君達は『ギヤスパルクの復活』をプレイしていた人がある日突然エターナル来てしまう、これと同じ事件がいくつも起こっていることを知ってる？」

「それについては、ちょい前に同じような境遇のやつと会ったから知ってるよ。お前らが知っているかは分かんねえけど、日本人の中で『ギヤスパルクの復活』を企んでるやつらがいることも知ってる。そして、そいつらが組織立って動いていることもな」

「そこまで知ってるんだ。なら話は早いね。あたし達、旭日騎士^{きよくじつきし}団は組織に対抗するために設立された対抗勢力だよ。団員は全員君達と同じく日本人。やつらの組織である教団には思いのほか日本人がいるみたいだからね、目には目をもってことで、高レベルなプレイヤー達を集めて周ってるの。だから――」

「俺達に旭日騎士団きよくじつきしたんに入れってことですか？」

リサポンの言葉をジローが繋げた。

旭日騎士団きよくじつきしたんに入るとは俺達にとっても悪い事じゃない。

騎士団の目的は俺達のものと同じく、教団の打倒だ。

既に教団への対抗勢力ができているのなら、俺達がわざわざ旅してプレイヤー達を探すよりも旭日騎士団きよくじつきしたんの団員として動く方が効率的だろう。

騎士団の大きさにもよるが、二人で動くよりは確実に仲間は集まる。

「そういうことっ！ 君達が教団の脅威に気付いているなら騎士団に参加することをおすすめするよっ！」

「証拠はあんの？ あんたらがその教団の手先じゃないっていう証拠は」

俺は一番の問題を上げた。アスカがキツと睨んできたが関係ない。こいつらのどこか抜けた様子から、教団の関係者である可能性は薄いとは思うが、万が一がある。

リサポンは腰に下げた可愛らしいデザインのポーチをこそごとと漁った。

そうして一つの平べったい形状をした板を取り出し、俺達に見せる。

「これ、いろんな情報を入れておいて、後で見ることが出来るアイテム。騎士団の団員の情報と、集めた教団の情報が入ってるよ」

リサポンが半透明の板を指ですいっとなぞる。

すると、中央に赤色の点が滲み、点は広がって剣のような模様に変化した。

剣の表示が消えると、板の右にメニュー画面のようなものが表示された。旭日騎士団きょくじつきしだんのバーの下に、教団のバーがある。

リサポンは上の、旭日騎士団きょくじつきしだんのバーに触れる。

そうすると、板の上から下までにズラリと名前が表示された。

一番上にはリサポンの名前が、上から十番目くらいのところにアスカの名前がある。

リサポンのネームをタッチすると、団長という役職名と共にステータスがグラフで表示された。

と言うよりこれは……。

「i P o d じゃね？」

「……………」

外装自体はいかにもファンタジーといったもののなのに、機能自体はアッ。ル社のそれである。

アプリっぽいのも入ってそうだ。

コホン、とりサポンが咳払い。

「とりあえず、これで信用はしてもらえたかな？」

「ああ、まあ身分証明みたいなもんだしな。騎士団きしだん云々は置いといて、俺達も自己紹介させてもらうぞ。俺はキール。職業ジョブはダテンシ。ジローと教団に対抗するための仲間を探してて、ハンブルクに行くのもプレイヤーを探すためだった」

「ジローです。職業はネクロマンサー。キールと教団を倒す仲間を探していました」

「え！？ 君達も教団に！？ だったらなおさら騎士団に入つてよっ！ お願いつ！」

「え、え、えつと！ あの……。おい、キール！」

リサポンに詰め寄られてジローが盛大にどもった。胸当たってるもんな。そりゃ、ああなるわ。

「リサさん、離れてくださいよっ！ 胸が当たってますってば」

アスカが悲鳴を上げながら、リサポンを引き剥がしにかかった。というか、こうして二人が並ぶと差がすごいな。

片方は巨峰でもう一方は絶壁。どっちがどつとは言わない。

そんなことを思っているとアスカがこちらをすごい形相で睨んできた。

何故分かった……。

そうこうしているうちに時間は過ぎていたようで、広場の入り口から商人のような男がやってきた。

「皆さん、ガンジェフ様がお呼びです」

巨峰と絶壁（後書き）

会話を転がすとなかなか止まらぬ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2838z/>

RPG W(・ ・)RLD——ぼくのステキなDA 天使サマ——

2011年12月17日19時51分発行